

『あわいももいろかんばせの
くろいみぐしのにんぎょうよ
はなよめいしょうにつきあかり
にじむべにいろだれのもの

めはなんどのやみをくい
ちいさいつぼみはさびのいろ
なみだにぬれたにんぎょうを
うめてもどしてあめやまぬ』

——この唄は嫌いです。
だって怖いのですもの——

主 鑄
〜さびおなんと〜
納戸

『あわいももいろかんばせの
くろいみぐしのにんぎょうよ
はなよめいしょうにつきあかり
にじむべにいろだれのもの

めはなんどのやみをくい
ちいさいつぼみはさびのいろ
なみだにぬれたにんぎょうを
うめてもどしてあめやまぬ』

この唄は嫌いです。私の住む村に昔から伝わる唄。だって怖いのですもの。

一番の歌詞は、花嫁の期待や恥じらいを、着飾らせた花嫁人形に見立てて謡ったように聞こえます。ささやかな幸福が待っているかのようでしょう。

けれど。だからこそ、二番の歌詞の瞑さが底知れぬものに感じられるの。一番の鮮やかな色彩に比べて、二番の歌詞の寒々しい感じはなんなのかしら。あるのは不気味さと悲しさだけ。

それにね、私が特に嫌いなのは最後の部分。

『うめてもどしてあめやまぬ』

どうかしら。物悲しい上に、恐ろしさまで感じませんこと。しかも『雨止まぬ』。なぜここに雨という言葉が出てくるのか、不可解な唐突さがこの唄をより気味の悪いものになっていると思うの。

でもね。今の私は、この唄に少し感謝しております。なぜならこの唄が、私をあの方に引き合わせてくれたのですもの。

あの方。浅田薊（あざみ）様。東京市の大学で勉強していらっしゃる学生さんなのよ。研究の一環だとかで、地方の伝承やわらべ唄を集めて回っ

ているのですって。

毎日になんの変化もないこの村に、突然現れた薊様はまるで異人さんのようでした。同じ男性でも、村の土臭い男衆とは全然違う。青葉の表面をそっとなでる涼風のような方。儂げな彼の肢体には、重さがあるのかしらと思うほどよ。

その薊様が、ことのほかこの唄に興味を持たれてね。村長（むらおさ）の家を何度も訪ねては、古老連から唄の由来を聞くようになったの。私たちにはただの耳慣れた唄に過ぎないものに興味を持つなんて、東京の学生さんは違う、と村の誰もが噂したものよ。

だけど二度、三度、遠い東京からわざわざ汽車を乗り継いでやって来る薊様の姿に、村の人たちはやがて気づき始めたの。

もしや学生さんは、例の唄や伝承だけではない、村長の家の一人娘にも興味があるのではないだろうか？ 近隣の村でも評判の美人の一人娘。

程なくして、薊様がこの娘を嫁に欲しいと申し出た時は、誰もが我が意を得たり、と互いの顔を見合ったものよ。やはり薊様は村長の一人娘に惚れていたのだと。

ええ、つまりこの私よ。

彼の結婚の申し入れがどれほど私の心を浮き立たせたか、想像できますかしら？ 私だってずっと心中で薊様をお慕いしておりましたもの。

だって初めてお会いした時、薊様はなんて言ってくださったと思う？ 私の顔をじいっと見つめて、こう言ったのよ。

——やっと出会えた。あなたは運命の人だ——

殿方にこう言われて心の動かない女がいるかしら。この瞬間から、私が薊様に心を奪われたとしても不思議はないでしょう。ほら、今でも身体中がふわふわと浮いているようよ。

婚礼後は彼の実家がある東京に行くの。ああ、東京。こんなつまらない閉じ込められたような村ではないかの地には、どんなきらびやかな毎日が待っているのかしら。

きっとすべてがからくり仕掛けのように、がちゃがちゃして、きらきらして、わくわくざわざわしているのでしょうかね。

あら。いけない、薊様がお話しているというのに。私ったら自分のことばかり考えてしまったわ。

今日は村を囲む山に二人で登ったの。山全体は低くなだらかで、常緑の木々が絶えず梢を鳴らしているわ。けれど山の北東の方角に、一箇所だけ岬の突端のように岩山が突き出た場所があってね。薊様ったら、ここに行きたいと言い出すのですもの。私、本当はこんな場所来たくはなかった。

山の緑の中から見えるこの突端は、村を上から睥睨しているようで、ちょっと怖いよ。村の人はほとんど近付かないわ。

それに、ここには朽ちた祠が一つぽつんと建っているだけなの。ほかには何もない不気味な場所。でもどうやら、薊様はこの祠こそが目当てだったのね。祖父や村の古老連から、祠があああの唄に関係があると聞いたみたい。

その祠を前に、目をきらきらと輝かせて薊様が説明してくださっているわ。正直、私にとっては、あの唄の由来がどうであろうと知ったことではないのだけれど……

ああそんなことを思っては駄目ね。将来の旦那様がこんなにも嬉しそうにお話してくださっているのですもの。

あの唄の由来。

あの唄の――

* * *

『まるで隠されているみたいだ。この祠。誰の目にも留まらないようにしているかの
ように。参ってもらうことのない祠になんの意味があるのかな。ふふふ。』

君のおじいさんや村の古老たちに聞いたよ。昔、この村でとある出来事が起こった
のさ。あの唄はどうやら、後年、その出来事を伝え聞いた村の人々が創作したらしい
。

そんな話聞いたこともないって？ ああそうかもしれないね。何しろ、誰にでも喜
んで聞かせるような話じゃない。

聞きたいかい？ ……いや、ごめん。違うな。君は聞かなければならないのだ。こ
の話を。僕と結婚する君は。

昔、この地域には「魂（たま）込め」という風習があったのだ。毎年、その年の豊
作を祈って人形を奉げる風習さ。

土地の神様に、花嫁に見立てた人形を差し出す習慣は古くからあった。でも、だんだ
んとこの習慣は形を変えた。ただ単に人形を奉げるではなくなっていた。

神を祀る社に奉げた人形に魂を込めるために、奉納した晩に男女が睦み合うよう
になったのだ。人形の前でね。これが「魂込め」さ。

……驚いたかい？ 今はこの魂込めは廃れてしまったからね。君が初めて聞くのも
無理はない。

それでは、これも知らないだろうね。この魂込めの儀を司る一族がいたことも。「
魂込めビト」と呼ばれた人々さ。

彼らは年に一度、この魂込めのために、社の中で選ばれた女人を抱く。それ以外
は遊んでいればよい身分だった。こう聞くと、なぜそんな特別な待遇なのかと不思議
に思うだろうね。魂込めには別の意図もあったからだ。

魂込めの際、魂込めビトの男は、これまでの一年間の災厄もその身に受ける。そうして土地のすべての災いを引き受け、さらに女人を抱き、奉げられた人形に魂を込める。つまり、土地の浄化と神への奉納を担う一族だったのだ。だから特別扱いだった。

とはいえ、僕には彼らが安穏と暮らしていたとはとても思えないけれどね。人の心など勝手なものだ。万事がうまくいっている時はいいだろう。けれど、不作になるなど事態が悪くなった時は果たしてどうだったろうね。

彼らは村人にとって、現世と異界の境そのものだ。畏れるべき異界人は、同時に都合よく憎しみや不満のはけ口にもなり得る存在だった。おそらく魂込めビトたちは、戦々恐々と暮らしていたのではないかと想像するね。

それに僕には、もう一つ仮説がある。

この魂込めビトの一族は、土着の民ではない。おそらく外から来た人間なのではないだろうか。土地の人からしたら得体の知れぬ「異人」だったのだ。ああ、ちょうど今の僕のようにね。ふふふ。

村の人間たちは、何らかの原因で流れついた彼ら一族を受け容れる代わりに、土地の浄化という畏怖的な役割を押し付けたのではないだろうか？

根拠はないよ。ただ……この祠が建てられるきっかけになった出来事には、その魂込めビトと、もう一人、人形師の男が関わっていたからさ。その男は、正真正銘「異人」だったのだ。外部から来た人間だったからね。

僕には居場所がないという同じ孤独が、二人を引き合わせたのではないかと思えてならない。激しく、強く。

ああ、言っておくけど、これから話すことは大半が僕の想像だよ。古老たちから聞いた話をもとに、僕が創作したことに過ぎない。

でも当たらずといえども遠からず、かな……？ ふふふ。

さあ、聞いておくれ。

ほら、過去の光と闇が、君の上にも降りてくるよ。』

* * *

ふと木を削る手を止め、彼は納戸の窓から空を見遣った。小さく四角い形に切り取られた青空が、彼の目に沁みる。

それらの色を目に沁み込ませてから、彼は自分の手の中にある木片を見た。ほのかに人の形を孕むそれを。

この村に落ち着いて二年が経つ。以来、彼は黙々と人形を作る毎日を送っていた。

彼の一族は代々、甲斐国の大名お抱えの人形作り職人だった。けれど二年前、人形師の父が大名のお家騒動の内紛に巻き込まれ、公金横領の罪を被せられてしまう。さらにはその咎により、父は斬首される。その後、国を追放された男は母と二人きり、父の出身地であるこの村に逃げのびてきたのだ。

国を追放された時、やっと十五の齢であった男は十七歳になっていた。

名を蘇芳（すおう）という。

人形作りの名人と謳われた父同様、彼の作る人形もまた、生きているかのようななまめかしさを湛えたものだった。零落したわが身に齒噛みしていた母が、この息子の才に賭けていたことも頷ける。

母子はかろうじて住まいは与えられたものの、村に父の親類縁者は遠縁のものしか残っておらず、身の置き所のない毎日を送っていた。加えて、口さがない村人たちは、蘇芳の父を罪人呼ばわりして陰口を叩く。没落したとはいえ、武家の出であり、気位の高かった母は、この状況から一日も早く脱しようと息子を焚き付けていた。

実はもの好きな領主が、この村で行われている魂込めの儀式にいたく興味を持ち、人形作りを競わせるという触れを出したのだ。

それによると、古くから人形作りを担う神主の一族と、流れ者ではあるが名の聞こえた人形職人の末裔である蘇芳に人形を作らせ、今年の魂込めに相応しい人形を自分で選ぶという。選ばれたほうには金子（きんす）に加え、領土の一部を分け与えるという褒美付きだ。この触れに、蘇芳の母は俄然色めき立った。

こんな田舎の領土などいらない。その代わりに、母は領主の人脈を通じ、どうにか追

われた国に夫の身の潔白と、母子の帰還を訴え出たいと考えたのだ。そのためには、なにがなんでもこの勝負には勝たねばならぬ。母は連日、口をきわめて蘇芳に言い聞かせていた。

「蘇芳、父の汚名返上と一族の名誉挽回はお前の肩にかかっているのです。決して負けることは許しません」

こう言ってはすぐに、必ず苦い笑いを浮かべるのだった。

「いいえ。お前の作る人形が、こんな卑賤な村のものが作る人形などに劣るわけがない」

それでいて負けるなとまた繰り返す……蘇芳は黙って頷きながらも、いつしか、母の言葉が自分の中を素通りしていくことを感じていた。

人形を作るという行為は物心ついた時から始めていた自然なことだ。呼吸と変わらない。優劣、凡非凡の別など付くわけもない。勝つ負けるという判断はどこから生じるのか。

それに、母がことあるごとに口にする「卑賤」という言葉にも、蘇芳は違和感を覚えていた。人間になぜ上下の別を付けるのか。

崇高な人間などおらぬ。これが若い蘇芳が骨身に叩き込んだ実感だった。父を斬首させた輩は、全員が立派な装束をまとい、楚々とした顔をしていた。が、腹の中は黒く腐臭を放ったものでいっぱいだったではないか。

人間に別はない。みな、同等に卑しい。

こんな遠雷のようなわだかまりが腹の底で唸る時も、人形を作っていれば忘れられた。蘇芳はこの村に逃げてきてから、以前よりいっそう熱心に人形を作るようになっていた。

そんなある日、いわゆる「人形競い」の触れが出て十日ほど経った時だった。

突然、あの男は蘇芳の前に現れた。

まずい。

蘇芳は息を切らせながら思った。焦燥と恐怖がじわじわと全身に満ちてくる。慣れない山道を駆ける足元が、いっそう覚束ない。

それでも胸に抱えた温かい塊を離そうとはしなかった。蘇芳は自分の腕で抱きつぶしてしまわぬようにしながら、木の根や石に足を取られつつ、走った。

背後で男たちの声が上がる。

「返せ、盗人の子お！」

「親父が盗人なら、がきや（子供）も盗人かあ」

屈辱的な言葉に顔が熱くなる。とたんに、足元の根につまづいた。あっと声を上げる間もなく地面に転がってしまう。痛いと思うより先に腕の中を見た。不安げな赤い目が自分を見上げているのを見て、蘇芳はほっとする。

が、すぐに追ってきた男たちに囲まれてしまった。自分と同じ年代の男たち三人は、舌なめずりをせん雰囲気だった。蘇芳は仔兎を胸に抱いたまま、尻で後じさった。

「返せ、ワッシャ（俺）の毘にかかっちゃった獲物だぞ」

「食べるのか？ お前の母上様がそがな臭いもん、潰してお口にぶちこむんか」

そう言うと男たちはげらげらと笑った。その笑い声に合わせて、蘇芳の指に小さい生き物の心臓の鼓動がとくとくと伝わる。

冬の厳しさが解け、陽射しに柔らかさが混じり始めた季節だった。男たちは全員が着物の前をはだけ、年中陽に焼けた浅黒い肌を剥き出しにしていた。その威圧的な塊が、さらにじりりと蘇芳を囲む。

ひときわ体格のいい男の手が、蘇芳の腕を取った。強い力に、手の中の兎が落ちそうになる。強い汗の匂いが鼻腔をつく。やめろ、と蘇芳は呻いた。

すると、ふ、と自分を掴む腕の力が緩んだ。はっと顔を上げると、男たちがどこか陶然とした顔で自分を覗き込んでいる。

「ホンマに女みてえだ」

そう言うが早いが、蘇芳の着物の合わせ目に手を差し入れてきた。ざらりとした熱い掌が自分の胸もとを這う。蘇芳の息が止まりそうになる。

男が叫び声を上げた。

「うひゃあ、やっぱりこりゃ上もんだあ、村のどの娘っこより手触りがええ」

その声に煽られたのか、残りの二人の男も蘇芳を押さえつけにかかった。もう兎のことなど、男たちの眼中にはないようだった。

着物を帯ごとむしり取られた。土のひんやりとした冷たさを肩のあたりに感じる。下から伸びてきた手に、太腿の内側を撫で上げられる。ざざざ、と音まで聞こえそうな嫌悪感が蘇芳を震わせた。

「やめろっ……！」

その時だ。我先に、と蘇芳の上に馬乗りになっていた男の姿が突然消えた。混乱でぼやけた蘇芳の目に、頭上から降り注ぐ光を浴びた別の男の影がある。

「お前っ」

「魂込め野郎」

男たちが口々に叫ぶ。魂込め。その言葉が蘇芳の耳を打った。魂込めビト。

うろたえた男たちが蘇芳から離れた。現れた男は無言で彼らを見回すと、蘇芳の上から引きずり上げた男の首に腕を回した。

「うひゃあっ」

男が情けない声を上げる。回された腕に必死に爪をたて、足をじたばたと揺らした。

「さっ、触るな、この魂込め野郎があっ」

ひいい、とほかの男たちも後じさる。

「穢れる、穢れるう、触るな、触るなあ」

とたんに、どんと魂込めの男が村の男を突き飛ばした。三人の男は振り返りもせずに山道を逃げて行く。その一部始終を、蘇芳は啞然と見つめていた。

魂込めの男と蘇芳が残った。男の姿は、山の色に決して溶け入らぬ美しい黒一色だった。目も、髪も、着ている着物も、何もかもが滴り落ちそうに黒い。

「怪我をしている」

やがて、ぽつりと男がつぶやいた。地面の上に投げ出されていた仔兎を抱き上げる。

「あなたが、彼らが仕掛けた罠を外してあげたのですか……？ 蘇芳様」

そう言うと、彼はまだ座り込んだままの蘇芳を見下ろした。瞳の黒だけが、涼やかというより、寂しげな色を湛えていた。その色に魅入られながら、蘇芳は小さく頷いた。

「はい。歩いていて、罠を偶然見つけたものですから。足に荒縄が食い込んでおりました。可哀

想に思って外したのです」

「ところが、それを運悪く連中に見つかったわけですね」

ふっと男は笑った。ここにきて、やっと蘇芳は自分のあられもない格好に気付き、あわてて身づくろいした。まだふらつく足で立ち上がり、深々と頭を下げる。

「ありがとうございました。おかげで助かりました。椽（つるばみ）殿」

この魂込めの一族の男は、名を椽といった。口をきいたことはない。が、四季を通じ彩りの変わらないこの土地で、椽はよそ者である蘇芳にも、明らかな異物として目に映った。

魂込めビトと呼ばれる彼は、日がな一日ぶらぶらとし、衣食住にも足りているように見える。が、その反面、村人たちから恐れられ、さらにはどこか侮蔑されているという複雑な感情の矢面に立たされていた。

けれど、蘇芳には魂込めビトの置かれた複雑怪奇な立場より、彼の持つ独特の雰囲気のように興味を惹かれた。「穢れ」や「畏怖」の象徴でありながら、毎年村の女たちが競って抱かれたがるのも分かる。

魂込めビトは何ものにも侵されず、自然を苛む風雨にも堪えないといった、神秘的な強さを発していた。さらには整った容貌を持ち、肌は土地の太陽に焦がされていない白い色をしている。

人形に魂を込めるべく女を抱く魂込めビトは、生まれながらに人を惹きつけてやまない力を持っているのだろうか。蘇芳は素直に感嘆してしまうほどだった。

その魂込めビトの男、椽の手の中で、仔兎が小さく鳴き声をたてた。蘇芳は駆け寄り、仔兎の耳をそっと撫でた。椽の手から仔兎を受け取る。そんな蘇芳を見下ろしていた椽が、小さくつぶやいた。

「蘇芳様は、俺が怖ろしくはないのですか」

彼の言葉に、蘇芳は椽を見上げた。

「怖ろしい？」

「先ほども男たちが言っていたでしょう……穢れです。俺は土地の災いを一身に受ける魂込めビトだ。だから俺に触ると穢れる。村の人間は、ガキの頃からそう言われて育っている」

そう言う椽の目が、真っ直ぐ自分に注がれている。一抹のむず痒さを感じながらも、蘇芳は答えた。

「椽殿は私を助けてくれた。それなのになぜ畏れることがありましょう。穢れるというのなら、むしろ——」

言いかけた言葉が引っ込んだ。自分の身体を撫で回した男たちの手指の感触が甦る。それらを追い出そうと、強い語調で吐き捨てた。

「崇高な人間などおらぬ」

椽が、心、と息を呑んだことが分かった。

「人間はみな卑しい。穢れも清冽もくだらない。まやかしに過ぎぬ」

思わず力を込めてしまった手の中で、仔兎が苦しそうに鳴いた。はっと我に返った蘇芳を見て、椽が淡く笑った。そして蘇芳の背後を指さし、言った。

「この先に沼がある。行きますか」

「沼？」

「蘇芳様、あなたも泥だらけですよ」

目の前に開けた光景に蘇芳は息を呑んだ。人の通ったあとがない、草木の茂ったけもの道を椽の後をついて登ると、程なくしてその沼は現れた。

小さい沼だった。折り重なって立つ木々に囲まれ、まるで隠されているかのように水を湛えている。

そしてとりわけ蘇芳の目を奪ったのは、水面の色だった。鮮やかな緑色だ。周囲の木々の姿を汀に映しながらも、色は独自の美しい緑色なのだ。どこからあの色は噴いているのだろう、と蘇芳は不思議に思った。

立ち止まってしまった蘇芳を椽が振り返った。

「ここは初めてですか」

高揚した気分を抱えたまま、蘇芳は大きく頷き、「はい」と答えた。

「でしょうね。この沼に村人は近付きません」

「なぜでしょう。こんな美しい沼なのに」

「大蛇が住むと語り継がれているのです。近付いたものを引きずり込み、食らうという」

そう言うと椽は草履を脱ぎ捨て、自らの足先を沼の水に浸した。

「蘇芳様もその泥だらけの着物を洗うといい。木の幹にでも干しておけばすぐに乾く」

蘇芳は戸惑った。そのためには着物を脱がなければならない。

彼の逡巡を察したのか、椽が笑った。

「安心してください。例え大蛇が出てきても、俺があなたを守ります」

「そ、そういうわけでは」

男女問わず、夏場は半裸のような格好で農作業をする村の人々と違い、蘇芳は肌を人目に晒すことに慣れていない。そんな蘇芳の心中をまたも読んだらしい椽が首を振った。

「……ああ。ここに人は来ません。人目もありませんから、ご安心を。それにそんな汚れた格好で家に戻るほうが、蘇芳様の母君を心配させるのではありませんか」

母という言葉にはっと蘇芳は身を震わせた。そうだ。母を心配させるわけにはいかない。

抱いていた仔兎をそっと地面の上に置いた。手早く着物を脱ぎ、何一つまとっていない姿で水に入る。襲われた証しである着物の汚れを手早く洗い落とした。

「肩も。頭も」

すると背後で声が上がった。えっと身体を起こす間もなく、肩を掴まれ、全身を水の中に沈められた。

「！」

「しばしご辛抱を。髪にも泥が付いている」

そう言いながら、椽は一つにくくってある蘇芳の髪をほどいた。水面に黒髪が扇のように広がる。椽は髪を結んでいた紐を口に咥え、蘇芳の頭や身体に付いていた泥を指先で拭き始めた。

最初は抵抗してもがいていた蘇芳だが、次第に彼の指に任せるようになった。沼は浅く、蘇芳は自然と正座する形になった。緑の水面に自分と椽の影が落ちている。

やがて、泥を洗い落としてくれた椽が離れた。立ち上がった蘇芳は、目の前の椽の腕に、赤い何本かの筋を見つけた。自分を襲った男に引っ搔かれた痕だ。思わず一歩歩み寄り、その痕に触れた。

赤い痕は椽の肌の上で哄笑しているように見えた。痕を指でなぞりながら、蘇芳はつぶやいた。

「痛くはありませんか」

「……別に。ガキの頃はこんな傷はしょっちゅうだった。こう見えても、俺は腕っ節が強いんです。喧嘩は日常茶飯事でした。死んだ親父の後を継いで、魂込めビトになってから、村の連中は俺に触れもしませんがね」

蘇芳は顔を上げた。水に浸かった椽の着物もしとどに濡れていた。互いの髪からぼ

たばたと滴が滴り落ちるのを見ながら、蘇芳は胸が苦しくなることを感じた。

土地の穢れを負う魂込めビトになった椽は、喧嘩すら厭われるのだ。

頭上でびい、と鳴き声を立て、二羽の小鳥が行き過ぎた。その声を聞きながら、なぜ我らは飛べぬのだと、蘇芳は頑是なく考えた。

「あなたの目は濁りが無い」

すると、黒く艶やかな髪から水を滴らせた椽がつぶやいた。彼の目は真正面から蘇芳の姿を捉えていた。蘇芳の胸がまた苦しくなる。

が、その苦しさには同時に、息もつかせぬ甘さも忍び入っていた。蘇芳はその甘さを不思議だと感じた。

また小鳥が頭上で鳴く。その声の真下で、地上にいるしかない蘇芳と椽は立ちすくんでいた。

先に視線をそらせたのは椽だった。困ったような笑顔を見せると、自分の濡れた着物を脱ぎ出す。

「俺のも干さなければ。本当はあなたの着物を乾かす間、この着物を貸そうかと思っていたのですが。こう濡れてしまっては」

「私に？」

椽が蘇芳の横をすり抜ける。

「あなたのその姿は、目の毒だ」

そうさらりと言ったのけると、椽は岸に上がり、手に持った着物を固く絞った。それから大きく広げ、ぱん、と張る。

黒い布地の翻る様を、蘇芳はじっと見つめていた。彼の言葉が、その動きに合わせて、どこかへ飛んで行ってしまおうように思えた。

数日後、蘇芳は怪我の治った仔兎を野に帰すため、同じ山道を登った。夜半という時間を選んだのは、また荒くれた男たちに出くわすことを警戒したのだ。

空には半月から少し膨らみを孕んだ月が、臨月の女のような姿を晒していた。その月光に助けられ、蘇芳は山を登った。

最初に罌を見つけたあたりでそっと仔兎を離す。小さい生き物は戸惑うように辺りを見回したが、すぐに深い草の中へと消えた。月光を湛えた葉がゆらゆらと揺れる。兎が揺らしたのか、それとも月光の重さで揺れたのか、蘇芳は青白く輝く揺らめきをしばし見つめていた。

やがて踵を返し、音もなく山道を下った。自分も母一人が待つ家へ戻らねばならない。自然と足が速くなる蘇芳は、だから気付かなかった。

頭上の木の幹の上で、ずっと自分を見下ろしていた視線があったことを。

夜陰に紛れ、すぐに見えなくなった蘇芳の後ろ姿を目で追いながら、椽は月を見上げた。

もとは名のある大名に庇護されていたせいか、蘇芳の物腰は常に柔らかく、粗野なところは一切ない。父親が何らかの咎で斬首された罪人だということだが、それにしではのどかな顔をしていると椽は思っていた。

憤りや悲しみといったものより、表情の透明さが勝っているように見える。だから椽は、蘇芳は無垢や無邪気というより、間抜けなのではないかと思っていた。自分の現在の状況に歯噛みして、奮起するだけの能もない間抜けなのではと。

だが。

椽の脳裏に、数日前蘇芳が垣間見せた激しい表情が甦る。

崇高な人間などいないと吐き捨てた蘇芳。その顔は押さえこんでいた憤怒が溢れ返り、生き生きと輝いてさえいた。端正な人形の面が割れ、生々しい人の顔が覗いた

かのようにだった。

ふっと椽は息をついた。あの顔を見た瞬間、自分の中に湧き上がったものを無理に退ける。

これからある男の家へ向かわねばならない。そう思いながら、ふっくらとした腹を突き出しているかのような月をもう一度眺めた。

ここから見る月は近い。手に掴めそうなほどだ。椽は月を見るだけでなく、昼間もここに上っていることが多かった。

この木の上から眺める山々の丘陵は果てもなく広く、自分が取るに足らぬちっぽけなものだと実感できる。それでいて吹く風と、表情をたゆまず変える空と一体であるかのような心持にもなる。だから椽はこの場所が好きだった。今夜も約束の家に赴く前に、ここで月を眺めていた。そうしたら思いがけなく、蘇芳がやってきたというわけである。

数日前助けた兎を放してやったようだ。やっぱり間抜けだ、と椽は一人笑った。あんなちっぽけな動物を救うために、自分が襲われかけたのだから。

それでも、気付くと眼下の闇に目を凝らしていた。無意識のうちに、蘇芳が放した仔兎を探す。

人の手に慣れた動物が、果たして野生に戻るかどうか疑問だが……

「生きろよ」

そうつぶやいた自分に戸惑った。はっと蘇芳が消えたほうを見る。

彼の優しげな姿が、そこに立っている錯覚に襲われた。

目指す家に近付くと、夜半を過ぎているというのに、中から騒がしい笑い声が聞こえてきた。戸を開けた椽は内心うんざりする。案の定、相手は泥酔していた。

「おおやっと来よった、魂込め様あ」

そう叫んで飛び起きた大路（おおじ）の顔は真っ赤だった。代々村の神事を担う社（やしろ）家の長男坊だ。

普段はほかの村人と変わらないが、魂込め以外の神事も取り仕切る社家は、村長（むらおさ）的役割も担っていた。数年前から身体を壊して伏せっている父親の代わりに、神事や人形作りを仕切るようになった大路は、実質村長的立場である。すでに彼に逆らえるものは村には存在しない。

つまり蘇芳と「人形競い」をするのはこの男なのである。

「お前らもう帰れ、明日も朝から仕事やろがぁ」

そう言いながら、大路は土間や囲炉裏端で酔っ払って寝転がっている男衆を蹴り付けた。ぶつぶつと文句を言って起きようとしぬ男には、声を張り上げて叫ぶ。

「おらぁ、魂込め様がいるんやぞ、噛みつかれるぞお」

そう言うと、大半のものがひいと悲鳴を上げて飛び起きた。椽の姿を見ると酔いも醒めるのか、白々とした顔で睨んでくる。その中に、数日前蘇芳を襲った三人がいることに椽は気付いた。

男たちが全員引き上げ、戯れた熱気が治まる頃、大路は囲炉裏端にどかりとあぐらをかいて笑った。

「あいつら、あの人形を襲ったそうやないか」

『人形』とは蘇芳のことであろう。椽は黙っていた。

「なんで止めた？ あいつら怒ったぞ。魂込めに邪魔されたってな。魂込めは村の女だけやない、男まで独り占めかってな」

口調は笑っているが、目は笑っていない。鋭い大路の目が、抉るように椽の表情を窺う。

「椽。ワッシャ聞いとるんじゃ。なぜ止めた」

「……蘇芳は俺がやると決めた。それを横から手出しされるのは我慢ならない」
「ホンマか。ホンマにそれだけか」

それ以上は答えなかった。大路は酒臭い息の中にも、どこか冷静さをちらつかせながら椽を睨んでいたが、やがてふんと鼻で笑った。

「まあええわ。あいつらがあの人形を犯してくれれば、お前の手間が省けると思ったんやけどな」

「……本気で思っているのか。蘇芳の貞操を穢せば、人形を作らなくなるなどと」
「おうよ」

椽の言葉に、鼻息荒く大路が迫る。

「あのイカれた母ちゃんはな、本物の人形師は貞潔であるべきだと本気で思い込んどる。男女の交合、情欲は汚らわしいもので、崇高な人形を作るためにはそれらを一切排除せなならんと。そのうち仙人みたいに飯も食わせなくなるかもな？ バカバカしい、今時坊さんだって女を抱いてるっっちゃうのに」

そう言うと、酒臭い息ごと、大路はぶはっと吹き出した。

「やしい見てみい、あの人形を。女でもそうそうおらんど、あんななまっしろいのは。ホンマもんの娘っこより色香があるときてる。村の男衆は本気であの人形を手込めにしたがとる、やらせりゃあ話は早いんやが」

がなる大路のけたたましさをよそに、椽はぼんやりと蘇芳の白い身体を思い出していた。

荒くれた男どもに押さえこまれていた蘇芳。細身の、たおやかとも形容できるあの姿は、確かに村の男衆にとって、激しい情欲の対象となるには十分だ。

「――」

ふと、自分の腹の底までがかすかに疼いていることに気付いた。そんな椽に顔を寄せ、酒臭い声で大路がささやく。

「やが、お前がやる言うたからな。やしいワッシャはお前に任せたんじゃ。ええな、お前はあの人形を犯せ。力づくでもなんでも、あいつがろくな人形を作れなくなればそれでええ。骨抜きにせえ。ああ？ 魂込めビト様」

「……」

人形作りを阻むため、蘇芳を犯すという突飛な話を聞かされた時、椽は自分からやると申し出た。それには理由がある。

椽は静かに大路を見た。

「……その代わりに、俺との約束を覚えているな……？」

椽の言葉に大路がふいと顔を離す。

「分かっとる。ワッシャが勝てば、お前がこの村から出ることを黙認してやる。大名

の城の普請が人手不足やそうや。これからの時期、どこの村も人手は農作業で取られる。やしい、城は人集めに苦勞しとるちゅうわけや」

そこまで言ってから、今度はぐいと顔を覗き込んでくる。にやりと笑うと、一言一言、粘度のある声音で続けた。

「お前、何がなんでもこの村から出たいんやろ。魂込めなんぞ、もううんざりなんやろ？」

「……」

「お前の一族は、数年前に親父さんが死んで、もうお前しか残っとらん。ここで、魂込めちゅう楔から自分を解放したいんやろ？ それにはワツシャが勝たんといけん。分かるな？ 言っとくが、勝手に村を出るなんて考えるなよ。そんな時は、草の根分けても探し出して、ぶち殺す。そがなんは嫌やろ？ だからこの村から出たいんやったら、まずはあの蘇芳を犯すんや。ええな」

この村を出る。繰り返し、胸の内で念じていたことだ。

ところがその念は、唐突に頭の中で咲き乱れた季節外れの曼珠沙華にかき消された。毒のある紅い色が、自分の腕に残る傷痕と重なる。やがて、その紅は蘇芳の姿に変じた。

彼の唇の色だった。

社の家を出ると、月明かりの中、自分を追ってくる足音に気付いた。ノノだった。大路の一番下の妹である。

ノノは椽に走り寄ると、全身を投げ出して抱きついてきた。

「今年の魂込め女、ウチになりそうよ」

椽が訊き返す間もない。ノノは顔を輝かせて話し出した。

「伝助さんとこのスエさん、去年と一昨年不作やったやろ、だから今年はウチや。やっと魂込めの女になれる」

伝助の妻であるスエが近年魂込めの女を務めていた。彼女を抱いて人形に魂を込めた数年、豊作が続いたのである。そのため、椽は亡き父の後を継いで魂込めビトになって以来、この十歳以上年上の女を毎年抱いてきた。

が、それが昨年と一昨年は不作続きだったのだ。しかも続く雨不足で、村全体がびりびりとしている。今年は魂込めの女を変えると村人たちが噂していたが、どうやらノノに決まったようだ。

まだ少女と言える年齢だが、ノノのむっちりとした身体が椽に押し付けられる。確かにスエとはまるで違う弾力を感じる。椽は熱く反応するというより、戸惑う。

「ねえ。兄さんが勝ったら、この村から出て行くつもりなんやろ。そんな時はウチも連れてって」

くすぐったく粘る声音に、ほとんど反射的に頷いていた。心は追いついていない。

けれどノノは月明かりに照らされた顔をほころばせ、いっそう強く椽に抱きついてきた。椽の唇に自分の唇を押し付け、激しく啄ばむ。鶏のようだと椽は思う。

ひとしきり男の唇を啄ばむと、やがてノノはほっと息をつき、顔を椽の胸に埋めた。ぼそりつつぶやく。

「あの子、嫌いよ。蘇芳。兄さんと人形競いなんて、忌々しい」

胸元を、彼女の言葉が吐息とともに湿らす。

「大きい国から来よったのかあ知らんけど、いっつも澄ましててさ。母親もそうよ。ウチらをまるで汚いもののように見る。それに何が気に食わんて、あの子の顔よ。村の女の誰よりも綺麗な顔しちよる。腹が立つ」

女の繰り言が、地の底から聞こえてくる唸りのように聞こえた。すでに形になっていないその言葉を聞きながら、椽は頭上を振り仰いだ。

月光が青く光っていた。

蘇芳たち母子があてがわれた住居は、もとは別の一家の家だった。けれど全員が飢餓や病気で死に絶えたという。そんな村の厳しい生活を、そのまま具現化したような家だった。

粗末な藁葺きの屋根、板戸の壁や床からは常に隙間風が忍び込み、母子の身体を冷たく苛む。さらには母の嘆きが追いうちをかける。

蘇芳は連日、そんな身と心に沁み込んでくる寒さと厳しさに耐えていた。今日も、人形競いで勝ちさえすればという母の言葉を背に、終日納戸に引きこもっていた。

住居の一角には小さい納戸があった。蘇芳はこの空間にすべての道具を持ち込み、日々人形作りに没頭していた。

ここは何ものをも侵入できない。

寒さも。母や村人の声も。過去も。

村全体は田植えが始まる時期で、朝からにぎにぎしい気配が満ちていた。遠くの田んぼから、田植えの唄を歌う男女の声も聞こえてくる。それらを遠く聞きながら、蘇芳は人形の頭作りを続けていた。

代々蘇芳の家で作ってきた人形には、一本の木から作る一木彫りと、頭だけを別に作り、胴体部分にはめ込む作りのものがある。蘇芳はこの頭が別にあるほうを好んで作った。

一木彫りは怖いというのが、蘇芳の正直な感触だった。今の自分では木本来の力を弱めてしまう。蘇芳は自分の作る人形を、上辺だけは美しいが、力がないと自覚していた――

一陣の風が、がたと納戸を揺らした。はっと蘇芳は顔を上げた。慣れない田んぼ仕事から戻った母の気配にも、夕飯だという言葉にも反応らしい反応を見せず没頭するうちに、すっかり日が暮れてしまったらしい。

小さい格子窓から射す月明かりが床に落ちていた。青白い光が分断されている。

家の中の物音に耳をすませた。どうやら母はすでに眠ってしまったようだ。集中が途切れると、急に何もかもが宙ぶらりんと思え、蘇芳はしばし呆然とした。今の今まで作っていた人形たちですら、無意味なものに見える。

ふと蘇芳は椽に連れられて見た沼を思い出した。神秘的な深い色を湛えた水の表面を思い描く。

とたんに、あの色を月光のもとで見たいと思った。そう思うと同時に立ち上がっていた。古びた納戸の戸を、なるべく音を立てないようにしながら開き、外に出る。

月も出ていない晩の闇は、蘇芳にあやかしの舌の上を思わせた。闇そのものが巨大なあやかしで、その舌にすぐにでもくるりと呑み込まれてしまうのだ。

が、今夜は違っていた。満月にほど近い月の光があたりを青白く照らし、輪郭を浮かび上がらせている。蘇芳は沼がある山のほうへ向かって走り出した。

まだ見えぬ水の音が聞こえた気がした。

曖昧な記憶を辿ってけもの道を抜け、沼へと辿り着いた時は心底ほっとした。とはいえ、迷う気はしなかった。なぜなら、ずっと水の匂いを鼻に感じていたからである。

目の前に広がった沼の姿に、蘇芳はしばし見入った。月明かりを反射した水面は、鮮やかな緑色に灰色と青味が混じり、ますます不可思議な表情を湛えていた。人を受け容れない冷たさと、厳かさと……この沼にこそ神がいるのではないか？ 蘇芳がそう思った時だ。

水面の中央が盛り上がった。神。いや。蛇？ 先日聞かされた椽の話が頭をよぎる。蘇芳は立ちすくんだ。

そんな彼の目の前で、水面はさらに盛り上がり、やがて中から一人の人物が現れた。

椽だ。

蘇芳は息を吞んで現れた彼の背中を見た。沼は立ち上がれば腰のあたりまでしか深さが無い。その沼の中を椽がゆっくりと歩き、対岸へと向かう。

水のきらめきを全身にまとった彼は、確かに蛇のようにも見えた。灰色がかった青さが肢体を包み、椽をこの世ならぬものに見せていた。水底に巣食うあやかしを引き連れ、うつつの世に這い上がってきたようにも思える。

蘇芳はいつしか時も忘れ、じっと椽の姿を見つめていた。

その時、気配を感じたのか、椽が肩越しに振り返った。蘇芳と目が合う。一瞬、その黒い瞳が揺れたように見えた。

椽が岸に上がる。そして一糸まとわぬ姿のまま、蘇芳のほうに向き直った。月光を上から、その光を湛えた水の光を下から浴びながら、二人は向かい合った。

互いに無言だった。けれど言葉はいらなかった。あらゆる光が、風や木々の音が、二人よりはるかに雄弁に語っていたからである。

すると、椽がふっと表情を崩し、笑みを見せた。とたんに刺すような痛みが蘇芳の全身を熱くする。椽の唇がひそやかに動く。声は聞こえない。蘇芳の目は彼の言葉を聞き取ろうと、食い入るように唇を見ていた。

が、程なくして、椽は岸に脱ぎ捨てられてあった着物をまとうと、木立の中へと消えてしまった。村の外れにある彼の家へ戻るのであろう。

椽の気配が消えて、やっと蘇芳は息がつけた。震えていた。苦しい。これはなんだ。そう思いながら胸を押さえる。

彼に抱かれるんだ。そう思ったとたん、がくりと脚から力が抜けた。土の上に膝をつき、自分の胸を右手で掴む。

魂込めの人形こそが彼に抱かれるのだ……

得体の知れないざわめきが、身を中心から溢れ出る。恐れながらも、どこか陶然としている自分に蘇芳は気付いた。

選ばれた人形の前で彼は女を抱き、人形に魂を込める。彼は同時に人形も抱いているのだ。その人形を、私は作る――

そう思うと、苦しさがよけいに蘇芳の心身を引っ掻いた。またも、作るべき人形の輪郭が遠くなることを感じた。

次の日も、また次の日の夜も蘇芳は沼へと足を向けた。毎日、夜が深みを増し、月がいざなうように空の中天へとぼる時を選んだ。

夜空はここ数日晴れていた。夜道を歩く蘇芳の足元を、忍び寄る月光がつき従う。

椽も毎晩沼にいた。この世の不思議を映したような色の沼を泳いでいる。そして岸に上がり、蘇芳と一言も口をきくことなく去っていく……ただこの繰り返しだった。

けれど蘇芳は、そんな彼の姿を見るうち、次第に人形の輪郭が浮かび上がるように思っていた。頭の中で相貌が自然と形を成し、色を孕む。それは自分の心身をも形作るように思え、はっと胸を押さえることすらもあった。

なぜだろうと蘇芳は思った。なぜこんなにも、椽という男は自分の想像や創作の熱意を刺激してくるのだろう。

満月を過ぎ、再び萎み始めた月灯りの下で、今夜も二人は無言のままに別れるはずだった。

ところがこの夜は違っていた。いつもなら対岸に上がる椽が、蘇芳のほうへと泳いで近付いてきたのだ。水面を、きらきらときらめく光の筋が、伸びては、消える。

月光を浴びた美しい蛇だ。

そう思った蘇芳は、椽が沼から上がり、自分の目の前に立ってもなお、ぽかんと彼の顔を見つめていた。水の匂いがした。

「蘇芳様」

これは幻ではない。そう思いながらも、彼の輪郭を染め出す月光が、すべてを夢のようにほろろと見せていた。

「なぜ、俺を見る」

答えられなかった。なぜ呼吸をする、と訊かれているようなものだと思った。

突然椽の手が蘇芳の手首を掴んだ。はっと身体を固くした時には、彼の両腕の中に抱きすくめられていた。

「訊いているのです。なぜあなたは俺をそのように見るのか」

「は、放してください、椽殿」

「あなたは自分で気付いていない。あなたの目は瞑い焰を宿らせている。その焰は焼きごてのようだ。見つめた相手の心身に、くっきりと痕を残す」

嘘だ。そう叫ぼうとした蘇芳より先に、椽が束の間身体を離し、蘇芳を覗き込んできた。

「見えますか……？ あなたが俺に付けた傷が。ここだ」

言いながら、椽が強引に蘇芳の手を取った。自分の胸に触れさせる。引き締まった肉を覆う、なめらかな肌。伝う滴。指先から伝わるそれらの感触が、蘇芳の意識を遠くへ飛ばしてしまいそうになる。

「ここだ。黒く焦げている」

「嘘だ。そんなもの、ない」

「いいや。分かるはずだ。もっと触れて。それでも見えないと言うのなら、この肉を剥がしてやってもいい」

手首に椽の指が食い込む。痛さに、思わず蘇芳は彼の胸に爪を立ててしまった。うっと椽が低く呻く。はっと蘇芳は息を呑み、自分の付けた痕を見た。

椽の胸の上に付いた爪痕は、やがてほんのりと赤みを帯び、蘇芳の目の前に浮かんだ。

「ほら」

顔を寄せてきた椽が低くささやく。

「またあなたが俺に傷をつけた。俺は傷だらけだ。あなたのせいで。あなたが付けた傷がどれほど疼くか分かりますか。どれほど俺を苛むか」

声とともに、いつの間にか背中に回っていた両手が身体を這い上ってくる。全身が震えてきた。椽の手は怖ろしい引力を持っていた。その引力が、自分の四肢を八方から引き裂く予感に駆られたのだ。

けれど抵抗する手は、いつしかしがみつくそれに変っていた。

「は、放し、」

「蘇芳様。あなたの姿の前では、自分が哀れな咎人に思えてしまう。いつも焼きごてを当てられているようだ。痛い。苦しい」

痛い。苦しい。そう訴える椽の声が、途方もなく甘く響く。蘇芳は身体の奥深くがじんじんと反応することを感じながら、どうにか震える膝を持ちこたえさせていた。

耳の中に、椽の声が忍び入る。

「思いを遂げさせてくれませぬか」

そう言うが早い、椽の手が着物の裾から滑り込んできた。大きく捲り上げ、熱を孕み始めていた蘇芳の陰茎に触れる。

とたんに、あらん限りの力で椽を突き飛ばしていた。不意を衝かれた椽が一步後じさる。蘇芳は震える足でよろよろと彼から離れると、掠れた声で絶叫した。

「私に近寄るな……！」

近寄るなど叫んだ蘇芳の言葉が、思いがけなく椽の胸を深く抉った。

本当に傷がついたと感じた。

蘇芳は震える手で着物の乱れを直すと、泣き出しそうな顔で睨んできた。性急過ぎたか。そう冷静に判断しながらも、椽の胸にお門違いの憤怒がじわじわと滲んでくる。

確かに、蘇芳を犯すという手段は、領主の褒美目当ての大路と、村を出たい自分の思惑が合致した結果だ。けれどそれだけではないと椽は直感していた。

この得体の知れない蘇芳への感情が自分を突き動かしている。さらには、こんなにもいたたまれなく感じさせる。

「なぜだ」

椽の低い唸り声に、蘇芳の顔が震える。

「なぜ、何をそんなにも必死なのだ。本気で思っているのか？ 貞操を穢せば人形が作れなくなるなどと。一生童貞でいろとでも言うのか。バカバカしい」

蘇芳が驚いた表情を見せた。

「どうしてそのことを」

「そんなものはあなたの母親の世迷言に過ぎないではありませんか。なぜそんなものに縛られる？ あなたはもっと自由になりたいと思わないのか」

自分の言葉が、そのまま自分の胸を刺す。

自由に。

白かった蘇芳の顔に、ほのかに色が戻ってきた。さわさわと、風が木々の葉を揺らし、水面を撫でて吹き渡る。

「確かに。私は母の言葉に縛られているのでしょう」

やがて蘇芳が小さい声でつぶやいた。

「私には人形を作るという行為が、自分にとって何であるか分かっていないのです。私は愚かで未熟です。この上、母の言うところの人形師としての『資格』まで失ったら……」

そう言うと蘇芳は悲しげに顔を歪めた。その相貌を月が照らし出し、この世のものならぬ儚さを醸している。椽はそんな蘇芳の姿に目を奪われていることを感じ、はっとした。

美しい。

「私は怖いのです。自分は何ものでもない、人形もろくに作ることでできない役立たずであると思うことが。けれど最後の自尊心の一線として、自分の至らなさに言い訳はしたくない。だからこの身を清廉潔白のままにしておきたいのです。貞操を捨てたからいい人形が作れなくなったのだという言い訳をしたくないのです。椽殿の言うとおり、バカバカしい世迷言でしょう。弱い奴だとどうぞ一笑に付してください」

この男、今にも崩れそうに見えるが、芯は強い。そう思った椽は、ふと聞いてみた。

「先日、あなたは言いました……崇高な人間などいない。人間はみな等しく卑しいと。なぜ、あのようと思われるのですか」

椽の言葉に、蘇芳は戸惑った顔を見せた。が、すぐに苦く笑うと、答えた。

「人の心がいかにあやふやで移ろうものか……父が公金横領の濡れ衣を着せられ、斬首された時、私は散々見てきました。父を陥れた者どもは楚々とした顔で偽りを並べ、父と親交を深めていたはずの者たちは一様に素知らぬ振りをしました。信じられるものなどこの世にはないと、私はあの時知ったのです」

「……」

「どんなに美しく装おうとも、人である限り我執の頸木からは逃れられません。仕方ないのです。だから私は思うようにしたのです。人間はみな卑しいと。こう思うと、悲しい苦しいといった心持が薄れる気がするのです」

そう語る蘇芳の表情は、穏やかですらあった。諦念をも超え、無我の境地に辿り着いてしまったのか。じわりと滲むもどかしさが、椽の胸を焼く。

「……もっと違う自分になりたいとは思いませんか。すべてのしがらみから解き放たれた、自由な身に……」

ふっと蘇芳が弱い笑みを見せた。

「自由とは何でしょう。言うならば、生きているものに本当の自由はない気がいたします。空を飛ぶ鳥たちにさえ自由はない。なぜなら生き残るために生のしがらみに縛られている。椽殿。我らも同じことではありませんか。我らは空に浮かぶ一片の雲にはなれませぬ」

清々しいほどに、欲の抜け落ちた顔で笑う。その表情を見た椽の全身を、この人の前で跪いてこうべを垂れたいという衝動が貫く。そんな自分に、椽は激しく戸惑った。

椽の混乱をよそに、蘇芳が言葉を次いだ。

「椽殿。お願いがあるのです」

「……はい」

「明日の晩からも、私がここに通うことをお許してください」

蘇芳の顔を見た。彼は穏やかな笑顔を湛えたまま続けた。

「あなたを見ていると、人形の姿かたちが浮かんでくるように思えるのです」

「……」

「私はあなたのために人形を作ります。あなたは女人を抱くだけではない、私が作った人形を——」

そこまで言うと、不意に蘇芳が言葉を途切れさせた。顔をほんのりと赤らめ、わざと沼のほうを見やる。

今度こそ、本当に彼を抱きしめたいという欲求が椽の中に湧き上がった。同時に苦しくなる。先ほど口にした偽りの甘言が、まさに棘となって自分を襲う。

痛い。苦しい。

なんてことだ。自分を押し流す、嵐のような感情に驚きながらも、椽は決意していた。

俺は、この方に、金輪際指一本触れまい。

「……蘇芳様」

自分の声に、蘇芳が視線を戻した。

「はい」

「無礼をお許してください。今後二度と、あのようあなたを困らせるようなことは致しませぬ。二度と……あなたには触れませぬ」

すると、ほんのかすかに、蘇芳の顔が悲しげに曇って見えた。月光がその瞳に映って揺れた。

椽は蘇芳に背を向けた。一步離れるごとに、月からも遠のく気がした。

『こうして二人は、夜毎沼で逢うようになった。とはいえ、言葉を交わすわけでもない、指先一つを触れ合わせるわけでもない。でも、その一見無音の透明な交流が、何より二人を分かちがたく結びつけ始めたのさ。』

言葉は人と人の間の蝶番の役目を果たす。けれど中には、何も言わずとも共鳴し合うということもあるのではないかな。

おそらく、互いの中に自分と似た空洞を見るのだ。その空洞の形が、絵合わせのようにぴたりとはまるのではないかな。

君にもこんな経験、一度か二度はあるのではないかな？……ふふふ。

ああ。蘇芳と椽の話に戻ろうか。

月が細り、やがて新月となり、闇が蘇芳の言うところのあやかしの舌の上になろうとも、二人は沼で逢うことをやめなかった。月のない晩は、星明かりを頼りに、暗い夜道を歩いて沼に通い続けた。

蘇芳の中に浮かんだ人形の姿は、ますますはっきりと形を結ぶようになっていた。椽を見ていると、その像にさらに細かな陰影がつく。輪郭が生気を孕む。

そんな時だった。椽が社大路の家に呼び出されたのは。

人形競いの日まで、二十日を切っていた。』

椽が大路の家の囲炉裏端に上がると、彼は開口一番言い放った。

「なぜえワッシャの言うとおりにせん」

蘇芳のことだとすぐに分かった。椽は努めて冷静な声で答えた。

「蘇芳の人形作りは進んでいないようだ。様子を見ている」

「ドアホうが。作ってからでは遅いんじゃ。何をぐずぐずしちやる」

そう吐き捨てる、ぎろりと椽を睨む。

「まさかお前。あの人形に情が移ったわけちゃうやろな」

無言を返した。その頑なな表情をしばし眺めていた大路は、やがてふんと鼻を鳴らした。

「まあええわ。言うことを聞かんのなら、村から出すちゅう例の約束も全部無しよ。一生、魂込めビトとして忌み嫌われながら女を抱いてりゃええわ。今年はこの日照りやしな、村のもんがピリピリしとる。魂込めの後に雨が降らんかったら、ますますお前の立場が苦しくなるぞお」

ふと椽は大路を見た。長年胸の奥底で淀んでいた問いを彼にぶつける。

「なぜ、我ら一族は」

「ああん？」

「なぜ我ら一族は魂込めビトになったのだ」

一瞬、大路が虚を衝かれた顔をした。が、すぐにはやりと笑うと、椽の背中をばんと叩いてくる。

「椽よ、その質問はなんでお天道様は毎日昇るのって聞いとるようなもんや。こがいな質問、答えられる奴があるか？ そういうもんなんや。お前の家が魂込めビトなんも、お天道さんが毎日昇るのもな。そやろ？」

「……」

「ああそれとな、お前、あの沼には近付いてへんやろな？」

すぐ間近にある大路の顔を見た。手には人形を作るための木彫刀を持ってはいるが、染みついた酒臭さはどうにも消えないようだ。

「あの沼には近付くな。ええな」

「……なぜだ」

「なぜも何もないわ！ 昔から何度も言うてるやろが！ 蛇がおる。あの沼にはおっきい蛇がおるやろうが！」

ここにきて、初めて椽は疑問を抱いた。

確かに互いが幼い頃から、大路は沼に近付くなと言っていた。が、彼は大蛇がいるなどと本気で思っていない。それではなぜ、椽にも村人たちにも、こうして執拗に言い募るのか。

もしや、沼に近付いて欲しくない理由でもあるのだろうか？

すると、唐突に降って湧いた疑問を蹴散らすように、大路が大口を開けて笑った。また強い力で椽の背中を叩く。痛いほどだった。

「ワッシャの言ったこと、忘れるな。お前は成すべきことをしたらええ。この村から出たいんやろ？」

村から出る。

そのあまりにも漠とした未来は、自分の中に沁み込んできた蘇芳の面影の前では、やけに心もとなかった。

大路の赤黒い口の中に、椽の疑問も葛藤も、すべて呑み込まれていく。

社の家を出た椽を、ノノが追いかけてきた。弾む若い身体を迷うことなく投げ出して抱きつく、こう言った。

「椽はん、夜に沼に行ってるんやろ？」

椽はぎくりとした。蘇芳と一緒にいるところを見られたか。

嬉々とした表情を浮かべ、ノノは続ける。

「この前、月の綺麗な晩、ウチ椽はんの家に行ったんよ。そしたら椽はん、家にいなかったから……兄さんにそう言うたら、あいつ沼に行っとるなって。椽はん、昔からあの場所が好きやったんやってね」

大路に沼のことを気取られたのはノノが原因か。それでも、椽は少しほっとした。蘇芳の姿を見られたわけではないらしい。

椽の心中にはとんと気付かずに、ノノが喋り続ける。

「椽はんってホンマ面白い人やねえ。あんな沼、村の人は誰一人畏れて近付かんのに。ねえ椽はん、今夜ウチも沼に行きたい」

ぎょっと椽は彼女を見た。

「沼に？」

「そう。ウチあの沼に行ったことがないんよ。やしい見てみたい」

「いや、でも。夜は暗い」

「椽はんは行くんやろ？ そんなら一緒に連れてって！ ウチも行きたいっ」

ノノの顔が強情な色を帯びる。この表情、兄そっくりだ。

椽は瞬時に思考を巡らせた。ここで頑なに拒んだら怪しまれる。さりとして沼に行っていないと言え、それならどこへ行っているのだとしつこく問い質される。

「……分かりました」

そう答えるしかなかった。ノノの顔がぱっと輝く。

「ホンマ？ ホンマね？」

束の間逡巡したが、椽はすぐに腹の底に力を入れた。彼女に向かって言った。

「ええ。その代わり、絶対大路には言わないで欲しい。絶対です」

手にした木片の木目をじっと見た。その流線的な生命の形に、しばし見入る。

やがてほのかに、彫るべき輪郭が見えてくる気がした。椽の姿が一瞬浮かび、消える。蘇芳は手元に置いておいた刀を持った。

考えた末、今度の人形は苦手な一木彫りにすることにした。頭を別にした作りの人形より、力を孕むように思えたのだ。

力。想いと言い換えてもいい。

吸い寄せられるように、刀の先が木目に近づく。互いが今にも張り裂けんばかりの気を放っている。木が、孕む。

その時だ。突然、頭上から声が降ってきた。

「蘇芳様」

びくりと蘇芳は顔を上げた。納戸の小窓を見上げる。小窓から射す光は物憂げな密度を増しており、もう黄昏時なのだと分かる。

椽だ。日が出ている時分に訪ねてきたことなどない。蘇芳は手にしていた木と刀を作業台の上に置くと、あわてて立ち上がった。

「椽殿？」

「蘇芳様。そのままお聞きください」

小窓のすぐ下に控えているらしき椽が囁く。

「なぜそのようなところから。どうぞお入りください」

「いいえ。俺と一緒にいるところを見られると、あなたまで白い目で見られます。すぐに帰ります。そのまま聞いてください」

薄い板壁越しに彼の声が響く。思わず蘇芳は板に手を触れた。

「蘇芳様。あなたは木に登れますか」

ところが、椽は突拍子もないことを言い出した。えっと蘇芳は声を上げる。

「木？ 木ですか」

「ええ。登れますか？」

「まあ多少は……」

「それでは」

椽が一段と声を落とし、板壁越しに蘇芳に囁いた。

板壁にぴったりと耳を付け、いつしか蘇芳は、自分の温もりが椽の温もりであるかのように錯覚していた。

風が少し強いせいか、夜空には雲がかかり、ほんのわずかの月光や星の光さえも隠していた。松明を持って先を歩く椽に付いて歩きながら、ノノは少し後悔していた。

何もこんな夜を選ぶのではなかった。というより、沼になど本当は興味がないのだ。椽がどうやら毎晩のように通っているらしいから付いていくと言ったに過ぎない。

木の根やごろごろした石、さわさわと鳴る草むらがノノの足取りを鈍らせる。この場所が切り立った崖のようにも感じられてくる。

さらには椽の周囲以外は一切の深い闇なのだ。黒々とした闇が自分を四方から見つめている。呑み込まんとしている。恐怖に身体が押し潰されることを感じながら、ついにノノは叫びそうになった。

もう帰りたい！

その時だ。松明の炎に照らされた椽が振り向いた。ノノに静かに告げる。

「着きました」

ノノは恐る恐る前方を見やった。

椽の姿の向こうに、ぼんやりと光る水面が見えた。うっそうと繁る木立に囲まれ、無言のままに炎を照り返す沼からは、確かに大蛇の一匹や二匹飛び出してきそうである。

「なぜ、こんな場所が」

声が震えてくる。自然と椽の身体にしがみ付いてしまう。

「こんな不気味な沼、ウチは好きやない、ウチは、ウチは」

ウチが好きなのは、椽はんや——

すると夜気の冷たさにも似た声で、椽が言った。

「では戻りましょう」

はっとノノは椽に抱きついた。

「嫌！ ウチ、椽はんのそばにもっといたんよ。昼は兄さんや村の人の目がうるさくてそばにいられへん。やしいこうして」

「ノノ殿」

「椽はん、なあウチのことぎゅっと抱いて、ほかの女には絶対に渡したくないんよ、ウチはずっと魂込めの女になりたかった、お願い、もうウチ以外は抱かないって言って」

とたんに、ノノの熱い言葉に煽られたかのように、心、と松明の炎が消えた。墨をかぶったような闇が二人を呑む。ひっとノノは悲鳴を上げ、椽の着物を握り締めた。

「つ、椽はん、火が、何も見えな」

その時だ。

声が降ってきた。

たれそ わが ねむりを やぶるは

ノノの全身が縮み上がる。体温が飛び、すぐ間近にいるはずの椽の感触も覚束なくなる。

われは ぬしなり
におふ におふぞ ちの においなり

がくがくと膝頭が震え出した。

声はわんわんと木立の間で跳ね返り、ノノの真上から降って来る。

ぐっと目を閉じた。けれど目を開いても閉じても、目の前は同じ漆黒の闇だった。恐怖のあまり、ノノの意識が遠くなる。

ここは われの ぬまなり やまなり
われは ははなり つまなり
によにん はいるを ゆるさず
によにん はいるを ゆるさず

ふっと身体から力が抜けた。

耐えられる一線を越えたノノの意識は、あっという間に闇に呑み込まれてしまった。

意識を失ったノノの身体を支えたとたん、流れた雲の隙間から月が現れた。同時に数多の星の瞬きも見える。椽は彼女の身体をそっと横たえると、頭上を振り仰いだ。

「蘇芳様」

椽の呼びかけに、かざりと頭上の梢が鳴った。程なくして蘇芳の声が降って来る。

「ここです」

現れた淡い月光を頼りに、椽も木に登った。一番低い幹の上に潜んでいた蘇芳の影を見つけると、そのそばに滑り込んだ。

「どうですか」

不安げな蘇芳の声に、椽は思わず笑ってしまう。

「蘇芳様に芸事の気があるとは思いませんでした。話に聞く都の猿楽役者もびっくりでしょう。ノノ殿は驚いて卒倒してしまいました」

「気の毒なことをしました」

「山の神は女性だと昔から言われています。女の人が立ち入ることを嫌う。もうノノ殿はこの沼に来たいなどと言い出さないでしょう」

そのためにこの滑稽な芝居を打ったのだ。ここまで効果があるとは思わなかったが。

蘇芳が困った声を出す。

「でもここまでやらずとも……女性を無闇に怖がらせてしまったようで心苦しい」

椽は明るさを取り戻し始めた夜空を仰ぎながら答えた。

「いいのです。この場所だけは誰にも侵されたくなかった」

「椽殿」

「あなたと俺の場所だ」

ぼんやりとしか光の射さない夜目にも、ぱっと蘇芳の目が見開かれたのが分かった。その輝きを目に留めながら、椽は続けた。

「俺はこの場所が幼い頃から好きだった。理由は分からないが、なぜか落ち着くのです。俺の寂しさを癒してくれるような——」

寂しいと言葉にして、ふと口を噤んだ。隣に座る蘇芳は、夜の闇を吸い込む沼のように、黙したまま自分の傍らにいた。

二人はそれから、しばし黙って夜空を見上げていた。星々は手を伸ばせば掴めてしまいそうだった。

「……椽殿」

やがて蘇芳が口を開いた。星の囁きにも似た声に、椽は彼を見る。

「なんでしょう」

「私は以前、自由などないと言いました」

「ええ。覚えています」

「でも今は、あるかもしれないと思っております」

蘇芳が椽を見る。

星の光を映した互いの目が、すぐ近くにある。

「私の自由は、あなたです」

「俺……？」

「はい。あなたの目を見ていると、なぜかどこへでも行けそうな気がしてくるのです。なんでもできそうな。否、やってみようかと思わせる。こんな気持ちは初めてなのです」

「……」

「本当の自由とは違うかもしれませんが。けれど。例え身体がどこにも行けずとも、心さえ自分の思いのままに在れば……それもまた自由ではないかと」

「蘇芳様」

「椽殿。そう思わせてくれたあなたは、きっと、私の心を繋いでいた頸木を外してくださったのでしょうか。感謝いたします」

思わず蘇芳のほうへと近付いた。両手は引力に逆らえない万物のように、自然と蘇芳の顔を包んでいた。蘇芳の身体が強張ったことを感じる。けれどそれは、すぐに彼の肌の内側に溶けていった。

闇が熱を発生し、蘇芳の姿を形作る。ほのかに紅いはずの唇を求め、椽は顔を近付けた。

触れぬと誓った。

とたんに、その戒めが椽の全身を打った。はっと目を見開く。自分の唇のすぐ間近に、蘇芳の唇があることを感じる。

「……お許してください」

つぶやいた唇の先に、蘇芳の吐息が触れる。

「あなたに触れぬと誓ったのに。俺は」

「椽、」

「今すぐにこの身を離します。どうか、許して」

言いながらも二人の身体は離れない。二人はすぐにでも触れ合ってしまうような唇から、言葉と、吐息を交わし合う。

「椽、殿」

「蘇芳様」

「い、」

気付くと蘇芳の両手が椽の両手に重ねられていた。星灯りが黒い髪と白い肌に映っている。

「椽殿、私は」

「許して、許してください」

「いいえ、いいえ私は、私も」

蘇芳の爪がもどかしげに椽の手の甲に食い込んだ。痛みが赦しだった。二人の身体がくずおれそうに重なる。

触れ合った部分から溶ける。

その時だ。下にいるノノが呻き声を上げた。びくりと震えた蘇芳が椽から離れた。熱が遠のく。彼を求める椽の指先が、空しく宙を搔いた。

「蘇芳、」

「ノノ殿が目覚める前に、行かなければ」

そう言うと、さっと身を翻し、器用に木を降り始めた。案外活発な少年なのかもしれないと椽は思う。

「蘇芳様、灯りを」

「いえ。今ならば月明かりで戻れます。椽殿も気を付けて。ノノ殿が風邪をひく前に一緒に戻られよ」

闇の中で、蘇芳が一礼したのが見えた。彼の影が木立に消える。足音が完全に絶えても、椽は五感を澄まし、蘇芳の気配を感じていた。ぐっと手を握る。彼の感触も匂いも声も、何もかもまだこの手の中に残っている。

遠くにそびえる山々の影を見た。星はやはり、悲しいほどに間近にあった。

自由と言った蘇芳を思い出す。椽は自分の胸を掴んだ。

あなたこそ。

あなたこそ、俺の道標だ。

数日、日々は静かに過ぎた。

ノノは椽の思惑通り、沼には一切近付きたがらなくなった。さらには人形競いに向け、さすがの大路も真剣に人形作りに取りかかり始めていた。

蘇芳も納戸に籠る時間が日増しに増え、沼にも現れなくなった。その姿はますます人目に付かなくなり、人形はんはホンマに人形になってしもたと笑う者もいるくらいだった。

一方椽は蘇芳の姿が見られなくても、さして落胆することもなく毎日を過ごした。

見られずとも感じていた。蘇芳のすべてを。

その間も、天には相変わらず雲の気配すらなく、じりじりと大地を焼く太陽が、人々の気力を奪っていた。彼らは口々に言い合う。

——魂込めさえやれば。大地の神様に嫁さえ奉げりゃあ、きっと雨をお恵みくださるよ——

切実な期待は狂気すら孕んでいた。村全体が、雨の気配を待ちわび、熱く淀んでいた。

「気に入らんのお」

大路は低く呻くと、すぐ近くにいる男衆の一人を蹴り飛ばした。彼の機嫌の悪さに、男衆が一斉にすくみ上がる。

「気に入らん、気に入らんぞお」

またも口の中で繰り返す。声音は呪いの言葉のように、大路自身を黒く凝り固まらせてしまうように見えた。

「どいつもこいつも、ワッシャの思うとおりにならん。あの人形も、椽も」

そこまで言うと、ぐいと手にある酒を干した。しばし酒と思惑の入り混じった胡乱な眼を見せていたが、やがて、にたりと笑うと、近くにたむろす男らを手招きした。

「お前ら、ちょっと来い」

それから入口近くにいるノノに向かい、しわがれた声で言った。

「ノノ。椽を呼んで来い」

見える。

蘇芳は手にした木片を見つめ続けていた。ここ数日、食事も睡眠も忘れ、ひたすらに己の中の人形の面影と向き合う日々が続いていた。

見える。もう一度蘇芳は胸の中で繰り返し、木彫り用の小刀を握った。

彫るべき人形の姿が見える。

刃先を木片に置いた。

木が、啼いた。

近付いてくる俗事の足音も、今の蘇芳には聞こえずにいた。

大路の使いで家を訪ねてきたノノの後を、椽は無言で歩いていた。ノノは珍しく無口だった。何かに怯えているようにも見える。

「椽はん」

やがて、そのノノが白い顔をして椽を見た。黄昏の陽は地平の向こうに沈もうとしており、光の残滓が、ノノの不安げな顔を照らし出していた。椽の胸にも、ざわりと黒い不安がよぎる。

「椽はん。兄さん、人形を作り終わったんよ」

「……そうでしたか。期日までまだ日がありますが」

「なのに、なんだか機嫌が悪いんよ」

そう言うノノの唇が震えた。血の繋がった妹のノノにさえ、大路という男は畏れられている。

ノノが顔を上げた。真剣な表情で椽を見る。

「椽はん。ウチは詳しくは知らんけど、兄さんに何かやるよう言われてんのやろ？」

蘇芳の人形作りを阻むべく、蘇芳を犯せということだ。が、さすがにノノには言えない。

椽が黙っていると、ノノはいっそう顔を白くしてつぶやいた。

「兄さんはおっかない人や。例え椽はんでも、気に入らんと思ったら何をするか分からへん。だから椽はん、兄さんの言うことには逆らわんといて。な？」

自分を見上げるノノの目は真剣だった。少女の熱いまなざしに、一抹の後ろめたさを覚えた椽は、精一杯優しい顔をして頷いて見せた。

大路の家に着くと、囲炉裏端には真っ赤な顔をした大路一人が座していた。やってきた椽をぎろりと一瞥する。

「来たか。椽」

椽は彼の向かいに無言で座した。とたんに、大路が大声でがなる。

「俺の人形はできたぞ。期日まで五日もあるんやが、さっさと作ってしもたわ」

酔った兄が怖ろしいのか、ノノの姿はいつの間にか消えていた。大路はぐびと酒をあおり、椽を睨んできた。

「ところでな、椽」

声が低くなる。血が滴りそうに陰湿な声音に、椽は彼を見た。

「お前、とうとうワッシャの言うことを聞かんかったな。あの人形を犯さんかった」

大路の目は真っ赤に血走っていた。

「どういうつもりや。ああ？」

「……卑劣な手を使わずとも、人形競いで勝てばよい。お前は自分の腕に自信がないのか」

「はんっ」

突然大路が腕を投げつけてきた。椽の顔の脇を掠めていく。

「やかましいわ、ワッシャが怒っとるんはな、なんでワッシャの言うことに従わなんだっちゅうこっちゃ」

「必要ないと思ったからだ」

「やかましっ。それはお前なんぞが判断することとちゃうわ、ワッシャが決めるんじゃ、ワッシャがあの人形を犯せと言うたんじゃ、なぜえやらん？」

とうとう椽は口を閉ざしてしまった。幼子の駄々と同じだ。何を言っても話にならない。

けっと大路は酒臭い唾を板間に吐いた。が、すぐににやりと笑うと、椽を覗き込んできた。

「だからな。ほかの奴らにやらせたわ」

椽は大路を見た。にやにやといやらしい笑いが大路の顔から滴っている。

「……何？」

「ほれ、この前お前に邪魔された奴らがおったやろ。あいつらを行かせた。今頃、あの人形を散々なぶっとるはずや。ワッシャあ足腰立たんようにしてやれと言っといた、で、お前らが飽きたらワッシャにも回せと」

もう大路の言葉は聞いていなかった。椽は即座に立ち上がっていた。ところがそんな椽の肩を、背後からぐいと大路が掴んできた。顔を寄せ、酒臭い言葉を吹きかけてくる。

「ここで出て行ったらな、ワッシャを裏切ったと考えるぞ。それでもええんか？」

執拗な声音が、椽の肌をぬらぬらと覆う。同時に、無骨な大路の手も食い込んでくる。

「椽。ワッシャを裏切るか？ お前は、この村から出たいんと違うんか」

それでも椽は無言のままに大路の手を振り払い、彼の家から飛び出した。

背後で大路の卑下た大笑いがさく裂した。

意識が痛みとともに甦ってくる。蘇芳は水底からゆるゆると起き上がる感覚を覚えると同時に、鈍い痛みが腹にわだかまっていることを感じた。ここはどこだ。ぼんやりとさ迷わせた視線の先に、月光が映る。

またも腹を孕ませた月が、小窓から自分を見下ろしていた。

とたんに意識が覚醒した。ところが身体を起こそうとした蘇芳を、真上から押さえつける手があった。自分を覗き込む顔を見て、蘇芳は愕然とする。山で襲われた三人だ。

寝かされている板の間の冷たさが、一気に背中に沁み入って来る。

おぼろげに記憶が甦ってきた。そうだ。日が暮れる頃、突然この三人が家に踏み込んできたのだ。驚いてすがる母を蹴散らし、納戸で人形を彫っていた蘇芳を引きずり出した。そのまま当て身を食らわされ、気を失ってしまったのだ。

「何を」

声が震える。男たちのぎらついた目が自分を見下ろす。ぞくりと蘇芳の全身が危険を感知する。

力の限り両手足をばたつかせた。けれどすぐに男たちの荒くれた手に押さえこまれ、まるで抵抗できない。

兄貴分らしき男が、蘇芳に顔を近づけてきた。酒臭さに蘇芳の息が詰まりそうになる。

「まるで白魚やないか。ああ？」

「酒でしめやんとな」

そう言うと、蘇芳の唇の中に何かを注ぎ込んできた。酒だ。鼻をつき、喉を焼く酒に、蘇芳は激しくむせた。顔をそむけようとするが、男の一人が蘇芳の頭を押さえ、もう一人が無理やり口の中に注ぎ込んでくる。

がははと男らが笑う。

「初めてのご開帳やしい、人形はんも酒でも飲んでなきや恥ずかしくてあかんやろ」

慣れない酒の味と匂いが一気に身体に回る。野卑な男らの声と合わせ、自分を体内から穢していく。

自分の腹の上に跨る男が、着物の前を乱暴に開いた。肌が夜気に晒される。

「たまらん、こりゃたまらんわあ」

男の固い掌がざらりと蘇芳の胸を撫で回した。酒の効果を嫌悪が煽り、蘇芳は逃れられない吐き気に身をよじった。

「や、め」

今にも吸いつかん勢いで蘇芳の肌を撫で回す男が、へらへらと笑いながら言った。

「しかしワッシャらが真っ先に人形はんの秘仏を拝めるなんて、魂込めビトに感謝せんとな」

魂込めビト。その言葉が、蘇芳を今一度覚醒させた。

「な……？」

驚いた顔をした蘇芳を、自分の真上にいる男がにやりと笑って見下ろした。

「ホンマはな、このお役目は、あの男が社の大路はんにやれ言われてたんや。やけどいつまで経っても、あの魂込めはあんたを手込めにせえへん。それでとうとう業を煮やした大路はんから、ワッシャらがこのお役目を仰せつかったっちゅうわけや」

頭上で蘇芳の頭を押さえつけている男が笑った。

「ええのよ。魂込めは堂々と女を抱ける、男くらいワッシャらに回ってきても罰は当たらん」

「村の娘っこより、人形はんのほうがええけどな」

口々に言いながら、男らが蘇芳の身に付けているものを引き剥がしていく。蘇芳は抵抗するのも忘れ、今の言葉を頭の中で繰り返していた。

魂込めビト。椽。

椽が自分に近付いたのは、社大路に命じられ、こうして手込めにすることが目的だったのか……？

そんな。酩酊と混乱が混じる。そこに記憶にある月光が重なり、蘇芳は息もできなくなった。

椽。あなたは私を騙していたのか。

「案外立派やないか」

兄貴分の男が、蘇芳の身体を見て言った。ほかの二人もげらげらと笑う。しかしどの声も今の蘇芳からは遠い。厚い膜を一枚被ったかのように、自分の五感には響かない。

ところが、そんな夢うつつの状態はすぐに打ち破られた。男が蘇芳のものを掴み、そのまま手を荒く上下させたのだ。未知の感覚の中に唐突に放り込まれ、蘇芳は思わず喉を仰げ反らせた。

尻の中心が、きゅうう、と痛いほどすぼまる。

「反応しちよる。人形はんが気持ちええ言うとるぞ」

「白魚や、見ろこの喉の白いところ」

蘇芳の姿を見ていたほかの二人が、口々に言い合う。その冗談めかした声音は、やがて覆い隠せないほどに熱を帯び始めた。

頭上にいた男が蘇芳の耳たぶを齧り、両の乳首を指先で転がしてきた。あっと意思とは関係なく、蘇芳の口から声が飛び出す。残った一人は恐る恐るというふうに、蘇芳の首筋を撫で、それからずしりと重さを孕んだ自分のものを手に押し付けてきた。

男の先走ったものが、蘇芳の手をぬらりと汚す。音にならない絶叫が、麻痺しかけた意識の中で炸裂した。

嫌だ。こんなのは嫌だ。絶対に嫌だ。椽。椽、助けてくれ。

けれどその名を呼んですぐに、腸まで落ち込みそうな絶望感が蘇芳を叩きのめした

。

否。椽は私を騙していた。あの男の笑顔は、言葉は、すべて偽りだったのだ。私を信用させるための、全部、偽り——

酒だけではない、蘇芳の悲憤が、彼の目を見えなくさせていった。ぼんやりと輪郭を失う視界とともに、蘇芳は自分から何もかもが剥がれ落ちていく感覚に襲われた。

もうよい。全部壊れろ。全部消えろ。

全部。全部だ。

ふっと笑った。

そうか。尊厳も何もかも剥がされ、剥き出しになってやっと、見えてくるものもあるのか——

私は本当は、何もかも無にしたかったのだ。棄て去りたかったのだ。母も。人形も

。

自分も。

男が蘇芳の両足首を掴み、大きく広げさせた。自分の痴態も、男らの声も、すべて蘇芳は遠くに感じていた。

「なんじゃあ、人形さんが笑ろてるぞお」

「気持ちええんか、ああ？」

そう怒鳴った男に身体をひっくり返された。腰を抱え上げられる。ものを掴まれ、後ろから舐め上げられる。乱暴な扱いに身体を揺らされながら、蘇芳はぼんやりと板間の目を見ていた。月明かりに照らされた板目が、美しい川のように見える。

その川の流れの間に、光るものがある。ふと目を凝らした蘇芳は、やがて、それが自分の木彫用の小刀だと分かった。気絶しても、これだけは握り締めていたらしい。

「——」

刀の輝きを目に映したとたん、不意に蘇芳の正気が戻った。その間にも、男らの手や舌は勝手に自分の身体を蹂躪している。蘇芳は刀のほうへと手を伸ばした。

いくら小刀一つがあっても、自分の力で男らには抵抗できない。

それならばいっそ、この身を――

男たちは蘇芳の身体に夢中で気付いていない。手を精一杯伸ばし、小刀の刃に触れた。指先にびんと冷たさが伝わる。母の顔を思い出した。泣きそうになった。

刃を手繰り寄せ、柄を手にする。

こんな恥辱を受けるくらいなら。

否。何もかも無になれと願う、こんな自分の本性を知ってしまった今となっては。

一気に振りかざし、自分の喉を突こうとした。

その時だ。

一つの影が手元を暗くした。はっと振り返ると同時に、自分を後ろから抱え込んでいた男の身体が、どうと板間に落ちた。驚いたほかの二人が飛び退く。

蘇芳は目を見開いた。

椽が暗がりに仁王立ちしていた。手に一振りの刀を持ち、息を激しく切らせたその姿は、立ちはだかる鬼神にも見えた。

きらぎらと月光の光を反射した目で、椽が残った男たちを睨む。無言のまま小屋に踏み入れると、あっという間に隅に彼らを追い詰めた。悲鳴を上げる男たちに刀の切っ先を向け、低い声で言い放つ。

「許さぬ」

鼻先に刃をつき付けられた男らがさらに甲高い悲鳴を上げた。恐怖にすくんだ顔を激しく震わせながら叫ぶ。

「待てっ、待て、ワッシャらは何もしとらんっ」

「そうじゃ、ワッシャらは大路はんを頼まれただけじゃっ」

情けない声で言い募る男たちを、獯猛な光を宿らせた目で椽が睨む。本当に喰い殺してしまいそうな殺気が、彼の全身から発せられていた。男の一人が怯えた声で叫んだ。

「それにお前こそええんかっ、大路はんを怒らせてただで済むと思っとるんかっ」

が、その言葉には答えずに、椽は刃のように鋭く尖った声を発した。

「二度とこのお方に触れるな。もしも、此度のような振る舞いに及んだ時は」

うう、と男らが呻く。

「必ず殺す。俺はお前らを決して許さぬ。自分の目で、自分の尻の穴を仰ぎ見ることになると思え！」

ひいと叫ぶと、男二人は気絶した兄貴分の身体を抱え上げ、小屋から飛び出して行った。椽は彼らのほうを見向きもせず、蘇芳のそばに駆け寄った。

「蘇芳様」

一糸まとわぬ姿の蘇芳を抱き起こす。床に打ち捨てられた彼の着物を手繰り寄せると、蘇芳の身体に巻き付けた。

「蘇芳様、俺が分かりますか。蘇芳様」

放っておいてくれ。

降り注ぐ声を聞きながら、蘇芳は口の中でつぶやいた。

放っておいてくれ。お前は、私を騙していた——

すると、椽が背中と両膝の下に手を差し入れ、蘇芳を横抱きに抱き上げた。現れた時と同じく、唐突に小屋を飛び出る。

椽は蘇芳の重さなど感じていないかのようだった。その足は風のように山へと向

かい、木立の中へと踏み入る。彼の腕の中で揺られながら、蘇芳はなおも繰り返していた。

もういい。放っておいてくれ。

だってお前は私を騙していた。お前は、私を――

手にしていた小刀を握り締めた。

月も震えていた。

沼に辿り着くと、椽は片膝をついて差していた刀を地面に置き、再び蘇芳を横抱きに抱き上げた。そのまま沼に入る。火照った身体に沁みる水の冷たさに、蘇芳は悲鳴を上げた。

「大丈夫」

その身体に、今度は椽の声が沁み入る。

「大丈夫だ、あなたは何も穢されてなどいない。あなたを手折らせるものなど、この世にはない……！」

必死の声に聞こえた。そんな彼の声は、果たして自分を悲しませるのか憤らせるのか、はたまた陶醉させるのか……判断がつかないままに、蘇芳は自分を支える椽の腕から逃れ出た。浮力が、ふわりと自分を支える。

腕を再び取ろうとする椽の手を払うと、蘇芳は震える足で岸へと向かった。水を引かずる身体の重さは、この世界でたった独りであることの証しにも思えた。

「蘇芳様」

椽の声が追ってくる。蘇芳は重い水の愛撫を感じながら、言葉を絞り出した。

「そのように優しく振る舞うのは」

掠れた自分の声を他人のようだと思う。

「社の大路殿に頼まれたからか」

空気がひやりと冷たくなったことを背中に感じた。けれど蘇芳は椽の顔を見ることもなく、岸へと向かう。

「大路殿に告げられよ。この蘇芳は人形など二度と作らぬ。もちろん人形競いも辞退する。だから安心なさるがいいと」

ばしゃりと音を立て、椽がすぐ背後に近付いてきた。逃げる間もなく、腕を取られる。

「蘇芳様っ」

「放せっ」

思わず振り仰いだ目に、自分を見つめる椽と、背後の空にかかる月が映った。その冴え冴えとした光が蘇芳の息を一瞬止め、そしてさらなる悲憤を揺り戻す。

こんなにも滑稽なのに。酷いのに。それなのになぜ、私の目に映るお前たちはそんなにも美しいのだ。

どうして私をこんなにも惹きつける！

「私を犯したいなら、今すぐにでもするがいい。私は抵抗などできぬ。私は弱い。お人好しの父を喪い、国を追われ母に泣かれ、それでも何もできずにつっ立っていることしかできなかつた卑小なものだ！」

どんと椽の身体を突き飛ばした。右手に固く握りしめている小刀がきらりと光る。

「どうした？ あなたはそれが目的で私に近付いたのだろうか？ 犯せばいい。さあ」
「蘇芳様。確かに初めはそうでした。俺は大路にあなたを辱めろと命じられた。でも、どうしてもできなかつた」

もういい。蘇芳は彼の手を振り払い、岸に上がった。何もまとわぬこの身に残るのは、滴る水と握った小さい刀一つだった。

苦しげな椽の声が響く。

「あなたを騙し、今こうして傷つけてしまったことに対して言い訳はしない。けれどもどうか、人形を作らないという前言は撤回してくださいませ。蘇芳様、あなたにとって人形を作ることはあなたの命そのもの、生きることそのものなのではありませんか」

手にある刀の輝きを見た。月からほんの僅か授けられた情けだ。

「あなたが全身全霊をかけて人形を作る姿を見ることが、今の俺の喜びなのです。す

べてなのです。蘇芳様、俺は」
「あなたは何も分かっていないっ」

鋭く遮った蘇芳の言葉に、椽が言葉を呑んだ。そんな彼を睨んだ目から滴が噴き出る。涙なのか、月を照り返した沼の水なのか。

「私はやっと分かった。身体の穢れなど、何ほどのものでもなかったのだ。怖いのは心が曇ることだ。何ものも心の綺麗な部分に留め置くことができなくなるということだ！」

椽の姿が、水の中にいるかのようにゆらゆらと歪んだ。

「やっと分かった。みんな消えろ壊れろ。私は本心ではずっと、そう思って生きてきた！」

裸の胸を自らの指で搔きむしった。そのままへたりと地面に膝をついてしまう。

「つらい。苦しい」

自分がこんなにも酷薄な人間であったとは。こんな心、捨て去りたい。そんな自分に人形など作れない。無意味だ。

「私は、私は、心があることがつらい！」

けれど人形を作ることだけが、自分が今在る理由であり、意味だった。

八方ふさがりの矛盾が蘇芳の息を詰まらせる。蘇芳は小刀を見た。遅過ぎた。もっと早くこうするべきだった。

柄を握り直し、刃を自分の首筋に当てた。お許してください。母上。胸の内で母を呼ぶ。

蘇芳はあなたの期待に副う息子ではありませんでした。不甲斐ない、弱いものでした。

最後の勝手をどうか許してください。蘇芳は、解き放たれたいのです。

月光を宿らせた刃が、冷たく喉に当たっていた。月を呑みます。刃を横に引く。

とたんに、伸びてきた手が蘇芳の手首を掴み上げた。強い力に、刀がぼろりと蘇芳の手から落ちる。

「つるば、」

彼の名を呼ぶ間もなかった。

蘇芳の目の前で、椽が拾った刀を自分の腿に深く突き立てたのだ。

「！」

衝撃に蘇芳の頭が真っ白になる。刀を刺したまま片膝を立てた椽は、柄を震える手で握り締めていた。

「なんということを」

刃は小さいとはいえ、ほぼ全部椽の肉の中に埋まっていた。開いた傷口からどんどん血が溢れ出てくる。

「なんてことを！ 早く傷口を塞がなければ」

「いえ。まだ、この傷口は塞げません」

眉間にきついしわを寄せ、椽が喘いだ。

「何を言っているのです？ 早く血を止めないと」

「いえ。ここにあなたの災いを封じ込めます」

思いがけない言葉に蘇芳は息を呑んだ。

「……えっ？」

「俺は魂込めビト。この土地の災いを身に受ける人間です。だから俺は、あなたの災いをすべて引き受けます」

蘇芳は呆然と彼を見た。

「私の、災いを……？」

「蘇芳様。俺にはあなたが穢れているのかいないのか、そんなことは分かりません。自分の心が忌々しいとあなたが言うのなら、きっとそうなのでしょう。俺には何もできない。ですが、あなたを悲しませる苦しみ、災厄だけなら、俺がこの身に受ける」

「……」

「だから生きてください。そうすれば、いつかは自分の心を許すことができるかもしれない。あなたの災いは全部私がこの傷の中に封じ込める。あなたは生きてくれ……！」

「なぜ。なぜ、そこまで」

ふっと椽が笑う。また蘇芳の心が苦しくなる。

「今、俺を生かしてくれているのはあなただ。あなたは俺の心を動かし、嬉しい楽しいといった彩りを甦らせてくれた。魂込めビトとして疎まれていただけの俺を」

「椽殿」

「もうあなたを誰にも触れさせない、二度と苦しめない。俺が守る。必ず」

蘇芳の身体が心持ち後じさる。その白さを目で追いながら、椽は言った。

「まだ俺が信じられませぬか、蘇芳様」

蘇芳は激しく首を振った。

違う、違うのだ。私は自分が怖いのだ。

目の前の男を激しく想う自分が怖いのだ！

「言ってください。あなたのために俺は何ができるか。俺はあなたのためなら、鬼にもなる。蛇にもなる」

「……もういい」

蘇芳の手が椽の頭を胸に抱き寄せた。熱い吐息が蘇芳の胸を濡らす。

「もういい。仮に、今あなたが偽りを言っているとしても……私はあなたを怨まぬ。なぜなら、私自身があなたを信じようと決めたからです。誰かを信じる、こんな強い気持ちをくれたのは、紛れもなくあなただ。椽殿」

「蘇芳様」

はらはらと落ちる蘇芳の涙が、椽の額を濡らした。蘇芳は自分の口でそっとその滴を吸い、椽の眉間に口づけ、両の頬に口づけ、鼻筋に口づけを落とした。

両の手でかすかに椽の顔を上向かせると、待ちかねていたように椽の舌が蘇芳の唇を舐めた。唇を吸い合う。

「蘇芳、」

名前が温みの狭間に溶けていく。蘇芳は半ば呼吸を詰まらせながら、椽の舌と唇が自分を優しく侵犯することを感じた。自分と彼との境が分からなくなるような――

「椽、殿」

「蘇芳様――」

自分を呼ぶ声が、全身に沁み渡った。

『それから期日まで、蘇芳は一心不乱に人形を作った。納戸に閉じこもり、日夜刀を振るう。そんな鬼気迫る姿に、彼の母親ですら近付けなかったほどだ。

その納戸のそばには、常に影のごとく控える姿があったのだ。椽だ。彼は昼夜を問わず納戸の外に立っていた。かといって蘇芳と言葉を交わすわけでもない。彼はただそばにいた。そんな椽を、村人たちは奇異と畏れの入り混じった目で見つめていたよ。

椽は人形さんに取り込まれちゃった、なんでも大路と仲違いしたって話じゃないか、おおコワ……

けれど村人たちに何を言われようと、椽は一向に気にかけることもなく、静かに人形の完成を待ち続けた。蘇芳の母が夜なべで行う読経を聞きながら、月や星の流れる様を見つめて過ごしたのだよ。

そして明日には領主の城へ向かわなければならないという晩のことだ。とうとう、納戸の中から、か細いが力強い声が聞こえてきた。

——橡殿——

はっと橡は納戸に駆け寄った。再び自分を呼ぶ声が、板壁越しに聞こえてくる。

——橡殿——

——蘇芳様——

それだけで十分だった。無言のままに、二人の心が通じ合う。

人形が完成したのだ。

橡は納戸の板壁にそっと触れた。納戸の向こうで、蘇芳も同じく壁に触れる。壁を介してはいるが、二人の心はちゃんと触れ合っていた。この数日、互いに姿を見ることはなかったが、蘇芳はちゃんと気付いていたんだね。橡が自分を守り、そばにいてくれたことを。

月と星の瞬きだけが、二人を見守っていた。

さあ、ここからはやっと「人形競い」当日の話になるよ。

蘇芳と大路は互いの人形を抱え、領主の城に参上した。大路もせいぜい気張って正装したであろうが、やはりもとは甲斐の国の出である蘇芳の隣にいては、風格負けしたかもしれないね。

さて。肝心の人形だけどね。君は、二人が一体どういうものを作ったと思う？

大路の人形は初々しい乙女の姿が刻まれた木彫りに、色鮮やかな端切れを何重にも着せた豪華なものだった。端切れが十二単のように美しく重ねられ、乙女の顔にはちゃんと朱の色も乗せられていてね。領主もその妻も、周囲に控える配下のものたちも、口々に大路の人形の華やかさを誉めそやした。

それでは蘇芳のほうの人形は、一体どんなものだったと思う？

領主の前に進み出た蘇芳は、人形を包んでいた布を静かにほどいた。紫紺の布からその人形が現れたとたん、誰もが驚いて息を呑んだ――

なんと暗い青一色の人形だったのだ。が、よくよく見れば、少し灰色がかった不思議な色合いのものだ。一木彫りの人形そのものは可憐な女人の姿をしているだけに、その不釣り合いな感じに誰もが首をひねった。

領主の妻が訝りながら蘇芳に尋ねる。

――この人形はなにゆえこのような色なのでしょう――

蘇芳は周囲の視線をものともせず、静かな口調で答えた。

――魂込めに奉げられる人形は、夜にこそ輝きます。どうぞ暗くなるまでお待ちください。そして陽が黄昏の中に溶け切り、夜の帳が城を包む頃、灯りを点していただきたく存じます――

この言葉に従い、一同は陽が暮れるまで待った。程なくして暗くなり、蘇芳の言うとおり松明の火を人形のそばに近付けた時だ。その場にいた全員があっと声を上げた。

火に照らされた人形が、蠢いたように見えたのだ。なぜだと思う？

暗い青色の本体に炎の明るさが映り、その揺らぎが人形そのものを脈打たせて見せたのだ。しかも炎の微細な揺らぎが、人形の表情のほんのわずかな丸み、窪みを浮き彫りにし、生きているかのようななまめかしさを現出させる。細かく彫り込まれた着物のひだや模様の一つ一つも、灯りに照らされたとたん、本物であるかのような重厚感を出した。

全員が息を詰めて蘇芳の人形を見つめた。今にも動き出し、喋り出しそうな人形を。

勝敗？ ああ。蘇芳に軍配が上がったよ。おそらくその場にいた誰もが、もしかして大路ですらこの結果には異存がなかったのではないかな。それくらい、蘇芳の作った人形の美しさには凄味があった。

闇に在って初めて美しさが分かる人形。誰も見たことがなかったし、こんなものを発想する人間がいるとも思わなかったからね。

こうして蘇芳は人形競いに勝った。

城に参上して数日後、村に戻った大路の口から、蘇芳の勝利は一気に知れ渡った。もちろん、じっと蘇芳の帰りを待っていた椽にも。

ねえ。ところで君は、この勝利が蘇芳に平穏をもたらしたと思うかい？

……ああそうさ。事態は逆だ。ますます蘇芳は村人たちから白眼視されるようになった。

代々人形作りを務めてきた社の家が負けたというだけでない、所詮はよそ者の蘇芳に自分たちの土地を穢されたような気になったのだろう。人の心というのは、つくづく不合理で厄介だね。

そうさ。この明確な理由のない人心の理不尽さが、あのような悲劇を引き起こしたのだろうね……

おっと。その前に、まずはあの儀式の話をしないとね。

表面上は変わらない数日が村を押し包んだ。やがて日は移り、とうとうやってきた。

魂込めの日だ』

まだ夏でもなく、春から脱しきれない緩さを抱えた空気の中を、朗々と嫁入りの唄が響く。蘇芳は納戸の窓からそっと外を見た。

魂込めの習慣を低俗だと断じて譲らない母は、この日一日決して外に出ようとし
ない。そんな母に気兼ねしていた蘇芳だったが、どうしても見ずにはおれず、納戸の
中からこうして魂込めの儀を盗み見していた。

田んぼのあぜ道を、本物の嫁入りのように、村人たちがずらずらと並んで歩いて
いく。その真ん中には、木を組んだだけの担ぎ屋台を担ぐ男たちの姿もある。上には
蘇芳の人形が乗せられていた。一行は大路の家の一角にある、儀式用のお社へと向か
っているのだ。

その後ろを、本物の花嫁さながらに着飾ったノノも歩いている。人形同様、今夜は
神へ奉納される身なのだ。蘇芳はじっと遠ざかるノノの姿を見ていた。

あの娘を今夜、椽は抱く。私が作った人形の前で……

ふっと胸を掴んだ。身体の端々から息苦しさが募り、じわりとしたやるせなさが、
齒の奥からも滲み出てくる。蘇芳はあわてて頭を振り、自分に言い聞かせた。

これが本望だったではないか。人形競いに勝ち、母の願いを達する。実際、領主は
自国の大名に口を利いてもよいと約束してくれた。それどころか、身の振り方が落ち
着くまで、母子ともども城に身を寄せても構わないとまで。母が涙を流して喜んだこ
とは言うまでもない。

出立を遅らせたのは、どうしても蘇芳が魂込めの儀を見届けたかったからだ。母は
すぐにでも領主の城へ行きたがったが、結局は蘇芳の強い申し出を呑んでくれた。大
義を一つ果たした息子への、せめてもの報いだったのかもしれない。

その母が、ふと漏らした一言を蘇芳は思い出した。

「あの椽とやら。我らと同じく、もとはこの村のものではないのかもしれませんが。
崩れたふうを装ってはおりますが、品格がある」

母の観察眼に恐れ入りながらも、蘇芳はさらに思いを巡らせた。

そういえば、刀を持っている村人は珍しい。しかも椽の持っていた刀の柄には、三頭の蝶という図柄の家紋まで付いていた。ということは、母の言うとおりに、椽の一族は外部から来た人間なのだろうか……？

ふっと窓から離れた。蘇芳が一人物思いに沈んでいる間にも、魂込めの行列は延々と続いている。

椽。口の中でつぶやいた。あの刀を持ち、鬼神のごとき形相で助けにきた姿を思い出す。

村に戻ってから椽とは会っていない。魂込めビトは、儀に際して数日身を清めるといふ。食を断ち、他人との交わりを断ち、心身を空っぽにするというのだ。

そうしてその空の器の中に土地の穢れ、災厄を受け、さらには奉納のために女を抱く……椽が己の身体に開けた傷口を思い出した。とたんに蘇芳は拳を握り、無意識のうちに納戸の板塀を殴りつけていた。

なぜだ。なぜ、椽はあのような役目を担わされているのだ。災いを受けながら、奉納の役割まで果たす。恐れられ、侮蔑されている。

くっと唇を噛んだ。彼が抱える孤独、悲哀を想うと、胸が裂けそうに痛む。

会いたい。今すぐに会いたい。

がくりと膝をついて自分の口を押さえた。こうでもしないと、本当に声に出して叫び出してしまいそうだった。

会いたい。椽、私はあなたに会いたい。

あなたは今夜、ノノ殿を抱く。私が作った人形の前で。

うう、と呻いた。

嫌だ。あなたがほかの誰かに触れるなんて耐えられない。

交わした口づけの感触が甦る。椽は蘇芳に嵐のような口づけを降らせ、身体を抱き

締めた。それ以上は決して乱れなかったが、すでに蘇芳の内奥は悟っていた。自分が待ちかねていることを。

熱く重みを増してきた身体に耐えかね、蘇芳は納戸の板の間に転がった。きつく股を閉じ、内腿を擦り合わせる。幻想の椽の手指が自分を翻弄する。

母上。蘇芳は激情の奔流に怯え、内心で母を呼んだ。

母上、私は穢れていますか。もう人形を作る資格はありませんか。けれどこの高揚はどうしたことでしょう。母上、正直に申し上げます。私は幸福なのです。

椽殿のことを考えると、幸福なのです。

鋭敏になった肌が、ふとした摩擦にも悲鳴を上げる。蘇芳は全身の要所が固く尖っていることを感じながら、一人喉を仰け反らせた。

遠い嫁入りの唄が、蘇芳の上を撫でていった。

中天に在る月が沁み入りそうに輝いていた。蘇芳はぼんやりと納戸の板の間に転がり、窓から射す月光を見上げていた。

魂込めの宴は程なくして終了したようだ。あとは魂込めビトである椽の奉納が残っているだけだ。

魂込めの日、魂込めビトは人前に姿を現すことを許されない。だから人々は各々の家屋で息を殺し、魂込めビトが女を抱く気配を全身で嗅ぎ取ることになる。

言ってみれば、村全体が椽に抱かれるようなものなのだ。なんという淫靡。

ふっと息をつき、蘇芳は起き上がった。ダメだ。このままでは頭がおかしくなる。もう寝てしまおう。忘れよう……

その時だ。はっと蘇芳は振り返った。

納戸の外に、密やかな足音を聞いたのだ。近付いてくる。板壁を射抜かん勢いで凝視する蘇芳の耳に、やがてその声は響いてきた。

「蘇芳様」

信じられない思いに息もできない。それとも月が喋ったか。

声が再び自分を呼ぶ。

「蘇芳様」

震える足で声がするほうへと歩み寄った。壁越しに相手を呼ぶ。

「……椽殿……？」

「蘇芳様。迎えに上がりました」

息を呑んだ。

「えっ？」

「出てこられますか」

戸に飛び付いた。一気に引き開けようとして、母屋のほうを見る。僅かに開いた板戸の隙間から寝入っている母の姿が見えた。その姿を確認してから、今度こそ蘇芳は納戸の戸を開けた。

目の前には椽が立っていた。

「……」

束の間、二人は互いの姿に見入った。伝え合う言葉は思いつかず、蘇芳は自分こそが空っぽになったと感じる。

「あ」

が、すぐに自分の姿が乱れているのではないかと気付いた。今日一日、目の前にいる男のことばかりを想い、息もつけなかったのだ。

急に気恥ずかしさがこみ上げ、あわてて身に付けている小袖を直した。やっと声が出る。

「いかなされました、椽殿。あなたは今……」

ところが、返事の代わりに返ってきたのは、椽の突然の行動だった。唐突に自分を横抱きに抱え上げたのだ。

「な？」

抵抗することも忘れ、蘇芳は腕の中から椽を見上げた。椽は蘇芳を抱き抱えたまま、ゆっくりと歩き出す。

歩調には上下左右の乱れがあった。先日、蘇芳の刀でつけた腿の傷が治ってはいないのだ。

「降りしてください。あなたはまだ足の傷が癒えてはいない」

「いいえ。俺がこうやってあなたを抱いて行きたいのです」

「椽殿、一体」

「魂込めの儀を行います」

ひゅっと蘇芳の喉が鳴った。食い入るように椽の顔を見つめてしまう。

「な……何を言っておられる。あれは、女人を抱かなければ」

豊穰を願うための魂込めなのだ。男女で番わなければ意味がない。

椽が蘇芳を見下ろした。艶やかに笑む。

「俺が人形に魂を込めるのです。それならば、俺が本当に想いを遂げたい相手を抱くのが道理でしょう」

そう言ってますます艶やかに笑った。蘇芳はその椽の姿に言葉もない。魂込めの今夜、魂込めピトである椽は、抗いがたい磁力を発しているのか。これはなんだ。蘇芳は痛いほどに高鳴る鼓動の狭間で考えた。

今、目の前にいる男はなんだ。美しくも怖ろしい鬼か。あやかしか。

やっとのことで、吸い取りそうに自分を見る椽の目から視線をそらせた。

「しかし、私は」

「清廉でなければ、人形を作れないと？」

蘇芳の言葉が詰まった。その間にも、椽は迷う素振りも見せずに歩いていく。

「……そうです」

「果たしてそうでしょうか？」

強い口調に、蘇芳は椽を見上げた。

「……え？」

「蘇芳様。あなたはあの人形を、どういう想いで作ったか。あの色。ほかの誰にも分からずとも、俺にだけは分かる。あれは……二人で見た月光の色だ」

はっと身を震わせた。その震えが椽にも伝わりそうで、蘇芳はとっさに下を向いた。

「蘇芳様、俺はあの人形を一目見て確信いたしました。ああ、あの方はきっと、俺

を想ってこの人形を作ってくださいだったのだと。俺に抱かれることを想って作ったのだと。それとも、これは俺の自惚れですか」

そう言うと、わざと顔を近付けて覗き込んできた。そうしてまた、怖いほどに艶やかに笑う。ずるい。蘇芳は叫びそうになった。

そんな顔をされたら否定できない。抵抗もできない。私はあなたの前で、心すらも裸になるしかない……

「それでいて、あなたはあのように立派な人形を作られた。蘇芳様。どんな荒波があなをなぶっても、あなたは蘇芳以外のものにはなれない。そしてこれだけは言える。何があっても、あなたは穢れたりしない」

ふっと椽が言葉を途切れさせた。蘇芳は彼を見上げる。

「何があろうとも、あなたは穢れない。俺がそう思うからだ。それでは足りませぬか」

思わず椽の首に両腕を絡めた。椽が寄せてきた蘇芳の頬に口づける。

「椽殿……あなたは、私のすべてだ」

「蘇芳様」

「だから構わぬ。あなたがそう言うのなら、私は……私は、何にでもなれる。どこへでも行ける。あなたが私を自由にしてくれる」

「蘇芳様」

「蘇芳と呼んでください。椽ど……椽」

椽が自分の名を呼んだ蘇芳を見下ろした。ふっと笑って唇に口づけた。

新しい世界が吹き込まれた。

魂込めの儀のお社は、大路の家屋の裏手にひっそりと立っていた。周囲を深い山林に囲まれ、この世の奥底にずぶりと落ち込んだかのように見えている。

父の後を継ぎ、魂込めビトとして毎年このお社に踏み入れるたびに、椽は女の体内へと潜り込む感覚を覚えた。手探りで深みへと到達し、自分の一部を置き去りにしていく感覚……

けれど今は違っていた。椽は腕の中にいる蘇芳をそっと板の間に降ろすと、月明かりの中で向かい合った。

蘇芳の人形が祭壇に据えられている。月の光を反射し、青白く輝いていた。光が作り出す陰影が生々しい深みを与え、人形は二人を見下ろすように真正面を見つめている。

お社の中を見回した蘇芳は、隅に横たわる人の姿に気付いた。あっと小さい声を上げる。正体なく眠っているノノだった。

「あそこにノノ殿が」

「緊張していたせいか、お酒をずい分飲まれていましたから。おそらく、朝まで目は醒めないでしょう」

もしやわざと飲ませたか。蘇芳が呆れた顔をすると、椽はふふ、と笑った。それから蘇芳を抱き寄せる。

椽の温もりに包まれながら、蘇芳はつぶやいた。

「あなたの言うとおりで。あの人形の色は、月光の色です。でも……それだけじゃない」

聞いているのかいないのか、椽の口が蘇芳の口を塞いだ。絡み合う舌の蠢きの奥から、蘇芳は語り続ける。

「あの色は、あなたの色だ……月光を浴びたあなただ。椽、初めて夜の沼であなたを見た時から、私の中にあなたはいたのです。そう。私は人形を作りながら、あなたのことを夢想していた。あなたに、抱かれ」

言葉は続かなかった。口づけ合いながら板間に倒される。着ているものを、ほろほろと椽の手指が解いていく。蘇芳は自分が椽の真下で晒されていくのを感じながら、そっと彼の両肩に触れた。張り切った筋肉が、なめらかな肌の下で動いている。その隆起に沿って撫でると、ふっと椽が吐息を漏らした。

散々蘇芳の口腔を味わった椽の舌が、蘇芳の身体の上を下りていく。首筋を通り、鎖骨の窪みを潤ませてから、両胸の丘へと辿り着く。突起を口に含まれ、柔く歯を立てられた時には、蘇芳の腰が反射的に反った。

すべての未知の感覚が、自分を生まれ変わらせる。蘇芳は椽の下で何度も喘ぎながら、そのたびに自分が脱皮していく錯覚に陥る。

けものの姿態を取らされ、後ろから椽の舌に溶かされた。甘い感触が恥ずかしさを覆う。椽の舌が肉に触れるたび、自分の四肢が先端からもろく崩れていく。しまいには肘で自分を支えられなくなり、尻だけを高々と椽の前に突き出すような形になった。拭い去れない面映ゆさに、蘇芳は首を振った。

「椽、そ、そのような」

けれど止めてほしいわけではない。その矛盾に蘇芳は自分の指を噛んだ。歯と歯の間からとろとろと唾液が零れ出す。

「……蘇芳」

背中に語りかけられた。はっと蘇芳の身体が跳ねる。

背後から被さってきた椽が、柔く蘇芳の肩に歯を立てた。喰られる。ぞくりとした閃光が蘇芳の中心を震わせる。

滴る。

背後から自分を侵犯したそれは、熱く、重たかった。慣れていない蘇芳に合わせ、最初は大きさを持って余すかのように震えていた。

が、次第に蘇芳が開かれてくると、力強い櫂のように動き始めた。繋がった二人を未知の領域へと運ぶ。

異物感が痛みとなり、やがて痛みが熱に変わる。自分では見えない漆黒の部分が、椽に擦られれば擦られるほど、紅く熟れるように感じられる。

椽の強さに合わせた身体がゆらゆら揺れる。大海に浮かぶ小舟だ。深奥で甘さが爆ぜるたび、蘇芳は熱い吐息を板間に垂れ流した。

「……誰も見ない。もっと乱れて。蘇芳」

今の今まで、二人の肉が離れていたことが不思議だ。そう言わんばかりに動かす椽が、蘇芳の背後から囁く。髪の本一本、皮膚の微細な孔にまで声が沁み入る。ぶるりと椽を啜えた下の口が震えた。椽が喘ぐ。

「魂込めの日に、魂込めビトを見たら目が潰れる……そう言われている。だから蘇芳、今ここだけが、二人でいることが赦されている場所だ。誰も俺たちのことを知ることがない……もっと。もっと見せて。もっと啼いて」

そう言った椽の指が、蘇芳の口の中に侵入してきた。声を出すまいと歯を食いしばっていた口腔を探り、歯の間をこじ開けようとする。椽が囁く。彼の声にこそ、甘い歯が生えている。

「声を聞かせて」

ぐん、と突き上げられた。

自分が鳴る。

「あっ」

思いがけず高く迸った声に、蘇芳ははっと震えた。けれど侵入した指が口を閉ざすことを許さない。

「そう。もっとだ、もっと」

言いながらますます激しく身体を打ってくる。振動の底から、腹の底から、痺れるような快さが立ち上る。それはやがて凶暴さ、奔放さをも孕み、蘇芳の枷を溶かしてしまう。

突かれるたびに、自分が剥かれていく。末端から生まれ変わる。口の中にある椽の指に吸いついた。唾液と一緒に、言葉がとろとろと零れていく。

「つ、つるばっ……」

「もっとだ。もっと、聞かせて」

「椽っ……！」

「それだけ？ もっと聞かせてくださらないのか。それとも、もうやめますか」

意地の悪い言葉に蘇芳は首を振った。

「い、いや」

「嫌か」

「い、いや、だっ……」

「嫌なのは、これを続けること？ それともやめること？」

分かっているくせに。

蘇芳は肩越しに振り返り、涙が滲んだ目で椽を睨んだ。

椽が笑う。その艶やかさの凄味は、無慈悲なほどだった。惨いほどに、美しい。

音をたてて打ちつけられた。あっと蘇芳の上半身が跳ねる。

「つつ、椽っ……」

「はい」

「喰らってください。私を」

蘇芳の吐息混じりの言葉に、ふ、と椽の動きが止まった。口の端からとろりと零れ

る唾液と一緒に、蘇芳は喘いだ。

「あなたの歯で、指で、身体で……言葉で。私を喰らって。喰らい尽くして。私はあなたに噛み砕かれない。椽、ぐちゃぐちゃに、形もなくなるほどぐちゃぐちゃにして。そうしてぐちゃぐちゃにされて、私は、あなたの中に、一生留まりたい……！」

とたんに口の中から指が引き抜かれた。両手で腰を抱えられる。

「っ！」

今までとは比べ物にならない勢いで突き上げられた。腹の底が砕けたと感じる。上にいる男の激しさが、蘇芳の全身に伝播する。

全身がさざめく。すべての触覚が尖る。破られ、喰らい尽くされ、剥き出しになった己が、相手と混じり合う。

「——っ！」

色も水も溶け合った。

月が、見ていた。

『こうして魂込めの夜は過ぎた。闇の帳が色を失い、東の空が白んでくる頃、蘇芳はお社を抜けて自分の家へと戻った。ノノが目覚めた時、椽がそばにいないと不自然だから、たった一人だね。』

家までの帰路を、蘇芳はふらふらの足取りで戻ったであろう。一晩のうちに何度も椽を受け容れた身体は、おそらく下肢に力が入らない状態だったのではないかな。椽の腕の中で目覚めた時、下からとめどなく溢れ出る残滓にも困惑したかもしれない。

とろとろと流れ出る椽の精は、自分の意志ではどうにもできない。ましてや身体に力が入らないのではなおさらだ。蘇芳は下からみるみる溢れ出る水たまりに、恥じ

らい、身をよじったかもしれないね。

……ああごめん。嫁入り前の女性に話す内容ではなかったかな。ふふふ。

けれど、蘇芳はこの上なく幸せだったろう。もし、明け方の道を歩く彼の姿を見るものがあつたら、なぜにあのように頬を上気させて笑んでいるのかと訝しく思ったに違いない。

分かるだろう。蘇芳も椽も互いへの想いに溺れていた。しかしこの状態が、普段は鋭敏な二人の感覚を鈍麻させ、あのような事態に追い込んだのだ……

二人は気付かなかつたのだ。村が今どういう状況であるか。そしてそれが、どういう形で自分たちに降りかかってくるか——

日照りは日に日に深刻さを増していた。水不足に加えた不作。領主に納める年貢分にも事欠き、自分たちが食す分も覚束ない。

こうなると、当時の村人たちにとっては、魂込めの儀が単なる風習、気休めなどではないことが分かるだろう？ 不作は生命の危機に直結する。そのため、彼らは魂込めの儀が今の状況を打破してくれると本気で信じていたし、すがつてもいた。

だから魂込めピトである椽は、村人たちの切なる願いと怨念の矢面なのだ。……怖ろしいね。こんな集団の念が一点に向かって暴走してしまつたら……おぞましいことが起きるのは想像に難くない。

聞きたくない？ いや。ここからがこの話の本題なんだ。頼むから耳を塞いだりしないでくれ。君には聞いて欲しいのだ。僕の妻になる君には。

魂込めの日から数日経つた。明日には、蘇芳と母が領主の城へ出立するという日のことだ。夕刻、山中を沼に向かつていた椽は、唐突に木陰から現れた大路と出くわした。

すえた、異様な光を目から発していた大路は、いきなり椽に殴りかかつた。不意を衝かれて体勢を崩した椽を足蹴にし、しわがれた声でこう叫んだ——』

「また沼に行く気か。行くんやねえとあれだけ言ってるっちゅうに」

そう言うと同時にみぞおちに蹴りを入れられた。衝撃で息が詰まる。

地面に倒れ込み、激しく咳き込んだ椽の髪を大路が引っ掴んだ。無理やり顔を上げさせる。

「お前、魂込めの儀、ちゃんとやったやろな？」

声に刺さりそうな殺気がこもっている。椽は腹の痛みで返事もできない。

「ノノの奴がな。ウチ、ホンマに椽はんに抱かれたんやろかって言っとったぞ。あいつ、正体なく酔っ払って、目が覚めたら朝やったと言うとった」

「……ちゃんと儀は行った」

今度は拳をみぞおちに喰らわされた。ぐうっと喉が奇妙に鳴る。

「ノノが生娘やからと思ってなめてんなよ。嘘やったらぶち殺すぞ。ああ？ このまま日照りが続いたら、村のもんがますます騒ぎ出す。いくらワッシャかて、殺気立ってる村の奴ら全員を押さえるのは無理やしな」

喉が裂けそうな勢いで咳き込みながらも、椽は無言で大路を睨み返した。その強い視線を、一步もたじろがずに大路も見返す。

しばし、互いを射殺してしまいそうな目線を交わし合った。その間にも、陰りを知らない太陽がじりじりと二人を炙る。

やがて、大路が目を見がめて吐き捨てた。

「……強情なところがガキの頃とちっとも変わらん。まあええ。それより」

そう言うと、さらにぐいと顔を近付けてきた。

「明日、あの親子は領主の城へ行くそうやな」

忌々しげな声に、大路の心中が垣間見える。領主の褒美を当てにし、さらには取り入ろうと思っていた大路は、蘇芳のせいですべてがふいになった。その上、代々神事を仕切っていた社の家の面目も潰された。

今の大路には、蘇芳は憎んでも憎み足りない相手なのだ。

「あんな奴ら、どうでもええわ。消えてくれればせいせいする。ただな。椽、お前まさか、あいつらに付いていくつもりやないやろな」

自分の頬が震えたと感じる。とっさに、椽はあらん限りの力で無表情を装った。

大路が粘りつくような声音で続ける。

「まさか、この村から出るなんて都合のええこと考えてないやろな……？ お前はワッシャを裏切った。ワッシャは、お前をこの村から出してやると約束していたのに。ああ？」

「出ていくつもりなど、ない」

椽は掠れた声を絞り出した。

これは本心だった。大路ではなく蘇芳を選んだ時から、この村から出るという望みは捨てた。

からからと大路が哄笑した。

「ホンマやろな？ もしもお前があの人形親子と一緒に村を出たらな、お前ら三人全員ぶち殺すからそう思え。領主には落武者崩れの山賊に襲われたとでも言うわ」

ぎっと椽は大路を睨んだ。

「お前……もしも蘇芳に手を出したら」

「お前が村に留まるなら、あの親子には手は出さん」

「しつこい。俺は村から出たりしない」

「そらそうや！ お前は一生この村からは出られん。そういう宿命なんや！」

異常なほど甲高く笑うと、大路は椽の肩を鷲掴みにした。

「ええこと教えちやる。ワッシャの、社の家にだけ伝わってることや。この話は傑作やぞお」

その口調にどこか隠匿めいたものを感じ、思わず椽は大路を見つめた。大路は舌なめずりをせん顔つきで椽を見返す。

「お前は村からは出られん。お前はこの村のもんじゃ。いいやワッシャのもんじゃ。お前は、魂込めビトなんやから！」

ざわりと風に吹かれた木々が鳴った。

急速に煽られた不吉な予感をも、太陽が焦がす。

夕餉を済ませ、母に挨拶をしてから、蘇芳はいつものように納戸にこもった。明日の出立に向け、用意はすべて整っている。母の意識は、すでにこの村から遠く離れていた。

しかし、もちろん蘇芳はそういうわけにはいかなかった。納戸の小窓を見上げ、今夜も沼に行く身支度をする。

蘇芳の心は、椽のもとにしかなかった。

彼の手指に慣らされ、もう自分のものではないように感じられる身体を見下ろしながら、蘇芳は思案していた。どう椽に切り出そうかと。

この村を一緒に出ましよう。椽。

よし、と背筋を伸ばした。必ず椽を説き伏せようと決意する。立ち上がり、納戸の

戸に手をかけた。その時だ。

板壁の向こうに人の気配を感じた。はっと立ちすくんだ蘇芳の耳に、橡の声が聞こえてきた。

「……蘇芳」

これから沼で会うのに。驚きは一気に不安に変わる。戸を開けようとした。そんな蘇芳を、橡の声が止める。

「待って。そこでいい。話を聞いてください」

「どうかしましたか。何が」

「いいのです。今の俺を、あなたに見られたくないだけだ」

明らかにおかしい。蘇芳は今すぐにでも戸を開けたい衝動に駆られた。けれどどうにか自分をぐっとなだめる。

「一体何があったのです。橡」

「……俺の一族がなぜ、魂込めビトになったのかが分かりました」

「えっ」

思いがけない話だった。蘇芳の耳がびん、と反応する。

「どういうことですか」

「大路に今日、聞かされました。大路の家では当主になった男にだけ語り継がれていることらしい……俺の一族がこの村に流れてきたのは、俺の曾祖父の代だそうです。俺の一族は……尾張の大名の家臣だった」

尾張。その名を聞いて、蘇芳の中に閃くものがあつた。

橡が持っていた刀の柄には家紋が付いていた。三頭の蝶が描かれていた図柄だ。あれは橡の先祖の家紋か。尾張の国の出であるという話にも真実味が湧く。

「ですが国内の反目していた家臣同士の争いに敗れ、一族もろとも領国を追われたらしい。そしてこの村に落ち伸びた……」

蘇芳は息を呑んだ。自分たちと同じではないか。

「曾祖父は自分の妻と息子たち、数人の家来を引き連れ、この村に逃げ込んだ。最初は歓待を受けたらしい。けれど」

椽が一度言葉を切る。続きが聞きたいような、聞きたくないような、奇妙な焦燥が蘇芳を襲う。

やがて静かな声音で椽が続けた。

「当時の村長（むらおさ）の男が、曾祖父の妻……つまり曾祖母に懸想した。そしてほかに行く当てのない曾祖父たちの状況に付け込み、彼女を思いのままにした」

どこまでもぶれない、静かな声だった。けれどその穏やかさが、却って椽の悲憤を蘇芳の胸に響かせる。

「その際、村の神事も司っていた村長は、風習なのだと偽り、曾祖父を説き伏せたらしい。豊穰を願い奉げた人形に魂を込めるために、男女が番ってみせる習わしなのだ……この時、魂込めの儀は生まれたのです」

「では……あの儀は、村長の欲望の言い訳から生まれたというのですか」

「こんな話を曾祖父が本当に信用したのかどうか、俺には分からない。けれど結局、曾祖父は妻が村長に抱かれることを黙認した。でなければこの村を追い出される。彼女は幾夜にも渡って村長の慰みものになった。拳句」

蘇芳は呻いた。なんとということだ。そんな理不尽な悲劇が、この村の奥底に隠れていたとは。

「曾祖母は自分の身を儚み、自害した」

「……なんと」

「さすがに曾祖父の怒りを畏れた村長は……彼女の遺骸を隠した。ある場所に」

「ある場所？」

「そしてそこに人々が近付かないよう、言い聞かせるようになったのです。その場所には大蛇が棲むから、決して近付いてはならぬと」

あっと蘇芳は声を上げた。

沼！ あの沼だ。大蛇が棲むと語り継がれ、人々が近付かない沼に、椽の曾祖母の屍骸は沈められているのだ！

つまり大路の先祖である社の当主は、己の欲望のために女人を死なせてしまった事実を隠すため、あの沼を禁忌の場所として触れて回るようになったのだ。

蘇芳の驚愕に構わず、椽は淡々と聞こえる口調で言葉を次ぐ。

「村長は曾祖母が逃げたと嘘を言った。曾祖父と息子、家来らは必死になって山を探したらしい。けれど見つかるはずもない。おそらく、もう妻は生きていないと直感した曾祖父の落胆はいかばかりだったか。自責の念でわが身を引き裂かん思いだったかもしれない」

「惨い。あんまりだ」

「失意の底にあった曾祖父は、村長の意のままだったのでしょう。村長はさらに奸智を巡らせ、彼らに役割を与えた。でなければ、この村を追い出すとでも脅したのでしょうか」

「それは……まさか」

「そう。魂込めビトとしての役割です。人形に魂を込めるために女と番う。さらには土地の災厄を受ける身となり、村の人々の不満、畏れのはけ口へと仕立てた。こうして我ら一族は魂込めビトとなり果てたのです……」

椽の声が途切れた。けれど蘇芳は言葉もなく、ただ板壁を見つめるしかなかった。

なんという因縁。その因縁が未だ椽を縛り、こうして苦しめている。椽の痛みが自分の全身をも痺れさせる。

板壁の向こうから、再び椽の声が聞こえてきた。心なし、細く響く。

「以来、社の当主にだけ代々この話が内密に語り継がれているらしい。大路は俺にこの話をして……だからお前らはこの土地の慰みものだと言った。お前は、俺のものと——」

とうとう蘇芳は戸を開け、外に飛び出した。納戸の板壁に寄りかかっている椽のそばに駆け寄る。そして息を呑んだ。

唇の端から流れる血が、椽の顔を汚していた。着物は乱れ、身体のそこかしこに痕がある。蘇芳はその痕を見て、眉をひそめた。殴られた、蹴られたという乱暴だけではない。

「椽……一体、何をされた」

「いいのです。俺はこの土地から逃れられない。それを身体にも叩き込まれたただけだ」

「違う！ そんなこと——」

椽の身体が崩れ落ちる。蘇芳は彼の身体を抱き寄せ、髪を撫でた。

「そんなこと。この土地から逃れられないなんて……そんなことは決してない。椽」

自分を支えてくれる蘇芳の背に、椽が両腕を回してきた。そっとつぶやく。

「蘇芳。沼へ行きましょう」

「でも、その身体では」

「大丈夫。今夜だけはどうしても、あの場所にあなたと行きたい。あなたは、明日には」

そこまで言うと、椽はふと口を噤んでしまった。蘇芳ははっと椽の顔を見る。

「椽、そのことですが」

「いいえ。いいえ、それ以上何も言わないで。あなたは明日にはこの村とは無関係の人間になる。ですからせめて今夜のこの時だけ、二人きりでいたい。あの沼で……」

互いを見る目の中に、神秘的な水の色が溢れ返る。沼に行きたいと切望する椽に、蘇芳も異論はなかった。二人は立ち上がり、互いを支えるように歩き出した。

闇が見守っていた。

音もなくついてくる背後の人影に、二人は気付かなかった。その人物は沼へ向かう二人の後を、迷いのない足取りで追った。

ぴたりと、まるで一つの生き物のように寄り添う二人を睨む目が、闇の中で暗く光っている。

ざざ、と草むらを鳴らす風の音が、人影の気配を完全に隠してしまっていた。

沼の汀で抱き合うと、蘇芳は椽の着物をするすると脱がせた。それから自分も瞬く間に同じ姿になり、横たわった椽の上に跨る。

しばし、指で椽の肌の上にある痕をなぞり続けた。殴られ、黒く変色している箇所もあれば、歯型と思われる痕まである。それらを手でなぞるたび、蘇芳は言い知れぬ口惜しさに唇を噛んだ。

私の椽に。なんということを。

けれどその激情が、今までになく自分を痺れさせることにも気付く。蘇芳は椽を口で潤し、自分のことも指で濡らしてから、腰を沈めた。入ってきた椽の形が、自分の中でゆっくりと質量を増す。

そんな大胆な蘇芳の姿に、椽は驚いた表情を見せた。が、その顔はすぐに愉悦の中に蕩け、二人は同じ律動で夜を刻み始める。互いの口から熱い吐息が零れ出る。

ともに昂ぶり、ともに達してからもしばらく、二人は繋がったまま相手の乱れた呼吸を聞いていた。やがて身を離れた蘇芳は、ぬらぬらと濡れてきらめく互いの身体を愛しげに眺めながら、つぶやいた。

「椽。私と一緒にこの村を出しましょう」

蘇芳の下に広がる椽の肌が、びくりと震えた。蘇芳は彼の胸にぴたりと耳を寄せた。ぞく、ぞく、と鳴る身体の音が聞こえる。

「……できません」

それらの音の下から、椽の声が立ち上った。

「もし俺があなたたちと村を出たりしたら……大路が許さない。俺たちは三人とも殺される。だから蘇芳」

「いいえ。私が領主様にお願いします。あなたがこの村から出られるよう」

そう言うと蘇芳は起き上がり、椽を見下ろした。

「私は母の安泰を確保しなければならない。これは私の責務です。それには領主様の城へ行き、母の身の振り方をまずは決めねばなりません。母の件が収束したら、あなたのことを領主様に願い出るつもりです」

「蘇芳」

「椽の素性を話せば、領主様はきっと興味を持たれるはずですよ。尾張の国の出であるという……あの家紋が付いた刀が何よりの証拠。椽。私は明日この村を出ますが、必ずあなたを迎えにまいります。ですからどうか待っていて欲しい」

「しかし」

椽の顔に強い惑いが宿る。この村を出る。切望しながら、あり得ないと諦めていたことだ。

そんな椽を見下ろしながら、蘇芳が言った。

「椽。もしもこの話を受け容れてくださらないのなら。私も明日の出立は取り止めます」

ぎょっと椽は飛び上がるように起き上がった。真剣な表情の蘇芳の顔が眼前にある。

「な、何を言い出すのか」

「本気です。椽が私を待つと、私とともに生きると言ってくくださらないのなら、私もこの村を出ません」

迷いのない真っ直ぐな目を椽に向ける。

「何を……たった今、母上の安泰が責務だと言ったばかりではありませんか」

「ええ。ですが仕方ありません。母にはこんな息子を持ったことが運の尽きと諦め

ていただくほかない」

「な」

「私はあなたと一緒に生きることこそが望みです。これが私の生き方です。椽はもしや、この瞬間を永の別れにしようなどと思ってはいないか。だとしたら、私は今すぐ死ぬ。あなたのいない生など、私には無意味だ」

強い口調だった。呆れるやら驚くやら、蘇芳の強さに吞まれてしまった椽は、しばし言葉を失ってしまった。対する蘇芳は、無邪気な笑顔を見せて言う。

「それともこれは私だけが思っていたことか。椽は私がいなくても生きていけ、」

椽の両腕が蘇芳を抱き寄せた。二人の身体が密着する。その隙間には、夜気ですら入り込めない。

「蘇芳……俺とて同じだ。あなたがいなければ、俺は」

「それならばなぜ、この村から出られぬなどと諦めるのです。あなたさえ私と生きると思ってくだされば、私はなんでもいたします」

想いが身体中に溢れ返る。けれど言葉にならず、代わりに椽は蘇芳の身体を固く固く抱いた。

椽の首に両腕を絡めた蘇芳が熱くささやく。

「私があなたの盾となり、時には矢となります。椽、私はあなたをこの身を挺して守ります。だから待っていて欲しい。私が戻ってくるのを——」

言葉尻は、椽の激しい抱擁にかき消された。

二人は再び身体を重ね合い、激情の奔流に溺れていった。

沼での一部始終を、こっそりと後を付けてきた人影は息を凝らして見つめていた。彼女の気配にまるで気付かない蘇芳と椽は、飽くことなく互いの身体を貪り合っていた。

やはり、とノノはぎりりと唇を噛んだ。

ずっと前から疑っていた。もしや椽は、蘇芳に心奪われているのではないか。兄の大路の命令にも従わず、さらに孤立するような事態になっても蘇芳をかばうなんて…
…

だからノノは蘇芳の家の周辺で椽を待った。明日には蘇芳親子が出立するという今夜、椽がやって来るのではないかと思ったのだ。すると案の定、椽は蘇芳に会いに来た。そして村人が誰も近付かない沼に二人で赴き、ああして男女の営みのような行為を――

ノノは目の前で繰り広げられた光景に立ちすくんでしまった。二人の行為にはためらいがなかった。その上、椽を受け容れた蘇芳の姿にも、ノノは息を詰めて見入ってしまった。

目の前の蘇芳の貌は、人形のごとき端正さではあるが、村人たちにいつも見せている無表情なものではない。椽の上で喘ぎ、髪を乱し、生命を吹き込まれたかのように生き生きと跳ねていた。

そんな蘇芳の乱れた姿を見れば見るほど、ノノの中にとある直感が膨れ上がる。その直感をもたらす痛みはノノの心を破裂させ、彼女の中を傷だらけにしてしまう。

椽はんはウチを抱いてなんかない。あんな蕩けるような、今にも裂けそうな、色づいた感覚、ウチは知らんもん。

蘇芳が喘ぎ、夜目にも分かる紅色に上気した唇から、きらきりと唾液を零す。その輝きが椽の上に落ち、なおも繋がった部分を動かし合う。その様は、ノノにも心情と相反した恍惚をもたらした。きゅっと両腿をすり合わせる。やがて不本意な快さが、

確信へと変わる。

椽はんはウチやない。あの蘇芳を抱いていたんや。きっとずっとずっと以前から――

嘔き出した嫉妬が、ノノの心身を切り裂いた。その傷口はすぐにどす黒く変色し、彼女の心を冷たく強張らせた。

椽は自分を騙していた。自分を沼に近付けないようにしたのも、おそらくわざとだ。

「……許さへん」

椽はウチを騙した。蘇芳もウチを騙した。

「許さへん。蘇芳。椽。魂込めビト」

翌日、早朝に蘇芳親子は村を出た。田んぼ仕事を始める人々は、無言のうちに彼らを見送った。その中にはもちろん、大路の姿もあった。

彼らを見る人々の目には、何が宿っていたか。よそ者への侮蔑、畏怖か。

それとも羨望か。

椽はその日から、外に出ることもなく静かに過ごすようになった。蘇芳を待つと心に決めていた。

例え何十日、何年かかろうと。蘇芳、俺はあなたを待つ。

太陽は今日もぎらぎらと照っていた。

雨の気配は遠かった。

蘇芳が領主の城へ経ってから二十日ほどが過ぎた。雨は依然降らず、飲み水にも事欠く様相を呈してきた村は、次第に恐慌の色を濃くしていった。

病が流行り始め、小さい子供たちや年よりからばたばたと倒れていく。日に日に募る不安に、村人たちは険のある目つきを交わし口々に言い合った。

「どうなっとるんじゃ、なぜえ雨が降らん。魂込めの儀を行ったちゅうのによ」
「何がいけんのか、大路はん、どうにかあならんのか」
「このまんまでは全滅や、土地ごと全員干上がっちまう！」

さすがの大路も、騒ぎ出した村の衆をなだめることができなくなっていった。慥然と酒を呷り、弱音を吐く若い衆を殴りつけるしか能がない。

そして酒臭い息をまき散らし、呪詛のように繰り返す。

「あの人形や、あの人形のせいや。よそもんなんぞが作った人形を奉げたから、土地の神様が怒りよった」

大路を囲む若い衆が口々に怒鳴った。

「そうじゃ、あの蘇芳のせいじゃ！」
「蘇芳を連れ戻せ、たたっ殺せ！」

憤懣をすでに村にいない蘇芳にぶつける。不安を伴った憎悪が、村中に満ち始めていた。

すると、酔った大路のそばに、す、と忍び寄る影があった。ノノだった。

「兄さん」

ノノは大路の耳元に囁いた。

「蘇芳だけやないよ……？ 雨が降らんのは椽のせいや」

大路は赤くなった顔を妹に振り向けた。

ノノは、ふ、と冷たく笑い、言い放った。

「だって椽は魂込めなんかしてへんもん。椽があつた晩抱いたんは——」

どす黒い念が、ずらずらと寄せ集まり、肥大化していく。

出口を求めたそれは、決壊寸前の悪夢と化した。

大地が鳴っている。そう思う間もなかった。

突然家の戸が乱暴に蹴倒された。驚いて顔を上げた椽を、あっという間に村の衆が取り囲む。先頭には大路が立っていた。

椽はたちまち取り押さえられ、後ろ手に縛り上げられた。土間の上に転がされた椽を、大路がぎらぎらとした目でねめつける。

「このろくでなしが」

言うと同時に腹を蹴られた。ぐっと椽の喉が鳴る。

「こともあろうに、あの人形と乳繰り合うとはどういう了見じゃ」

次々と村の衆の怒号が降って来る。

「この日照りはお前のせいじゃ！」

「魂込めビトのくせして、なんちゅうやっちゃ！」

「ワッシャらを殺す気かあ！」

怒声と同じ勢いで蹴られた。抵抗もできず、朦朧とした椽の頭上から、やがて大路の声が聞こえてきた。

「この日照りは、お前が魂込めの儀をしなかったからよ。こうなったら土地の神様の怒りを鎮めるには、これしかないわ」

低い声音に、ざわりと椽の全身が総毛立つ。大路は倒れ込んだ椽をねめつけながら、言った。

「魂込めのお前を奉げるしかない。人柱や」

人柱。

生き埋め。

「！」

抵抗して暴れ出した椽を、男衆が押さえつけ、動けないようにする。

大路が叫ぶ。

「今さら抵抗しても遅いわ！ やしいワッシャああれだけ言ったのに。言うことを聞かんかったお前が悪いっちゅうわけや」

言いながら、大路は椽の家屋の中を見回した。必要最低限の物しかない家の中で、彼の目に留まったものは、明らかに異彩を放っていた。

大路が家に上がり込み、それを手に取る。はっと椽は顔を上げた。

父の死の間際、譲り受けたあの刀だ。

すらりと鞘から抜いた刃の輝きを、大路が舌なめずりをして見る。

「おお。これや。ずっとガキの頃から欲しいと思っと思った」

「……触るな！ それは我らの」

ぎろりと大路が椽を見下ろし、哄笑した。

「お前は死ぬ！ そんなお前にこの刀はまさに宝の持ち腐れなんじゃ！ いや、お前らのような間の抜けた一族に、こんな刀はもともといらんかったっちゅうこっちゃ！」

大路の言葉に、椽が歯を剥いて暴れ出した。男衆に乱暴に取り押さえられても、口の端から血を噴き出させながら椽は叫んだ。

「大路……！ お前は、否、お前ら社一族は、我ら一族を卑怯な策で陥れこの地に留めただけではない、こうして最期の最期まで辱めるというのか……！」

この言葉に、男衆が訝しげに視線を交わし合った。

「卑怯な策って、なんのこっちゃ」

一人の男が、首をひねりながら言った。

「そういやあワッシャの祖父さんが、そのまた祖父さんから、魂込めビトは村のもんじゃねえって聞かされたことがあるって言うとったな」

ところがそれらの声を遮り、大路が怖ろしい勢いで怒鳴った。

「やかましいっ！ そげなことはどうでもええ！ それとも何か、お前らが代わりに人柱になるか？ 土に埋まるか？」

大路の剣幕に、男衆はたちまち黙り込んだ。彼の指示通り、乱暴に椽を引き立たせる。

一行は椽の家を出、絡まり合う糸屑のようにもつれ合って歩き始めた。その中心にいる椽は、すでに抵抗することもなかった。

田んぼの真ん中のあぜ道を一行は歩いて行く。魂込めの日のような、どこか浮き立った気分は微塵もない。村人たちは全員一行を一瞥してから、すぐに目をそらせた。

椽は今や、実体を持たぬはずのあやかしそのものだった。村の忌むべきもの、不安、憎悪の権化となり果てていた。

——魂込めビトを見たら目が穢れるよ——

——あれは暑いも寒いも感じない化け物なんよ、やしいウチらと違って日照りになってもしれっとした顔でいられるっちゅうわけよ——

——人柱やて。ざまあみろ、化け物が——

真上から照りつける太陽のもと、それらの声を、椽は遠く聞いていた。

けれどどの言葉も椽には届かず、今の彼の中に在るのは、ただ一つの面影だけだった。

……蘇芳。

蘇芳。

そんな椽に、背後から大路が耳打ちする。

「北東から鬼は来る。今、村の男らが山中のその方角に穴を掘ってるからよ。お前をそこに埋めてやるから、せいぜい鬼と仲良くせえ」

その間にも、四方から男衆に小突かれる。大路が狂ったように哄笑した。

ふと、椽は道の前方に立つ人影に気づいた。ノノだった。今にも怒り出しそうな、笑い出しそうな、奇妙に赤い顔をして椽を睨んでいる。

彼女の前を一行が通り過ぎる時、ノノが叫んだ。

「……あんたが悪いんよ！」

掠れた声だった。

「ウチを騙したりするから……あんな、蘇芳なんか……蘇芳なんかと……」

涙が混じった声になった。けれど椽は振り向かなかった。

背後で、女の絶叫が上がった。

「あんたが悪いんよ！」

強過ぎる陽射しとともに、痛切な声が椽を炙った。

深い山中に掘られた深い穴は、誰かの口の中に見えた。

さあ、入れ。

大路の声に従うまでもなく、椽の身体はその暗黒の中に放り込まれた。

闇。

上から土が容赦なく被せられる。

さらなる闇。

ああ、私の足に翼が生えていたらいいのに。

蘇芳は息を切らせながら、空を振り仰いだ。小鳥が楽しげに、ちち、ちち、と鳴き、蘇芳の頭上を過ぎていく。

領主の城を出て二日が経っていた。もうすぐ村が見えてくるはず。はやる心を押さえられず、蘇芳の足が自然と速くなる。

案の定、領主は椽の素性に興味を持った。蘇芳の真摯な懇願にも心を打たれたのか、椽を城に呼び寄せることを聞き入れてくれたのだ。

椽。蘇芳は何度も何度も心の中で彼を呼ぶ。

椽、これであなたは自由です。村を出て、私と生きましょう。

山中を歩く足は一向に緩まない。蘇芳には椽のことしか頭になかった。村に近付いていることを感じれば感じるほど、足はますます速まる。

椽。椽。

その時だ。

不意に、騒がしい気配とともに、山中から三つの人影が躍り出た。ぎょっと蘇芳は立ちすくむ。相手は男二人と女一人だった。女の顔を見て、蘇芳は驚いた。ノノだ。

男二人とノノも、蘇芳の姿に驚いた顔をした。が、すぐにノノが甲高く笑い、蘇芳のほうへふらふらと近付いてきた。

「なんだあんた、今頃何しにきたんよ」

蘇芳は思わず眉をひそめた。酒の匂いがする。しかも着物は乱れ、大きい乳房が丸見えになっていた。はだけた裾、上気した肌を感じを見ても、山中でこの三人が何をしていたのか容易に察しがつく。

蘇芳の心中を見抜いたのか、ノノがきつく目をすがめた。

「ああ？ 穢いものを見る目で見るとやないよ。あんたも同じやないの。椽の上で、嬉しそうに腰振ってたやないのっ」

そう言うと喉を仰げ反らせて笑った。男二人もにやにやと笑い、ノノの素肌に手を這わせる。

……おかしい。蘇芳は直感した。いくらなんでも、ノノはここまで乱れた女人ではなかった。

とたんに、身体中がざわめき出した。直感が蘇芳に警告する。

「……何があった。ノノ殿」

ところがノノは答えない。ますます甲高く声を張り上げて笑うと、男の一人に組みつき、唇を吸った。男がノノの乳房をもみしだく。もう一方の男もノノを背後から抱きすくめ、自分のそそり立ったものを彼女の腰のあたりに押し付けた。そのあられもない様は、獣同士の戯れに見えた。

「なんもかんも、ねえ！」

やがて男二人に身を任せながら、ノノが叫んだ。蘇芳はますます動けなくなる。

ノノは泣いていた。けたけたと笑いながら、泣いているのだ。

「あんたの大事な人は、もういないよお」

「……何？」

男らの野卑な息遣いと、ノノの狂態が蘇芳の足を取る。地面に足がずぶずぶとのめり込んでしまいそうに感じる。

「どういう、こと、ノノ殿っ？」

「あんたらがいけないんよ、ウチを騙すからっ、あんたらが、あんたらがぁ」

「ノノ殿！ 椽に何かあったのか？ 椽をどうした！」

今にも転がらん勢いで三人に近付き、ノノの身体を男らから引き離した。両肩を強

く掴み、揺さぶる。

「椽、私の椽に何をした！」

一瞬、ノノの瞳が蘇芳を見据えた。涙に濡れた瞳には正気が宿り、静けさすら湛えていた。

が、それはみるみる決壊し、飛び出てきた狂気と混乱が、すぐさま彼女の正気を打ち消した。

ノノが甲高く笑いながら怒鳴る。

「あんたの大事な人はねえ、人柱になってしもたんよお」

人柱。

蘇芳の思考が停止する。

「あの男は魂込めビトのくせに、魂込めをしなかった。やしい神様が怒ったんよ、雨が降らんもん、あの男は人形の代わりに、神様に」

椽。

呆然とノノから離れた蘇芳は、ふらふらと村のほうへと走り出した。

背後でノノの声が上がる。

「あんたらがいけないんよ、あんたらがあっ……！」

よろめく足取りで戻ってきた蘇芳を、村人全員が驚愕の目で迎えた。蘇芳は必死の態で、椽が埋められたという場所を聞いて回った。けれど誰もが口を噤み、答えない。

半狂乱になった蘇芳は村中を駆け回った。やがて押しかけた男衆に捕まり、大路の

前に突き出された。自分の前に立ちふさがる大路を見て、蘇芳は目を見張った。

大路の腰に橡の刀が差してあったのだ。

ふんと鼻で笑い、大路が吐き捨てる。

「今頃何しにきた。橡はもうおらんぞ」

絶望に視力を失いかけた蘇芳の目に、橡の刀がゆらゆらと映る。三頭の蝶が震える。
。

「あいつは魂込めビトの務めを怠った。やしい神様が怒ったんじゃ。人柱になったんは、報いじゃ」

その瞬間、得体の知れない禍々しくも強いものが、蘇芳の深奥から噴き出てきた。それらは蘇芳の血管、肉、肌を突き破り、一気に噴出した。

「許さぬ」

言葉とともに、血が口から飛び散った。

目からも血の涙が噴き出る。

怯えた男衆が後じさった。

「許さぬ。社大路。橡の一族を陥れたのみならず、橡をも辱め、命を奪った……許さぬ。許さぬ！」

ただ一人、大路だけが動じずに、化け物のように変じた蘇芳の形相を睨みつけた。

「覚えておれ……この恨み、決して忘れぬ。この恨み必ず晴らそうぞ。孫子の代まで呪ってやる。覚えておれ。覚えておれ！」

文字通り真っ赤な絶叫が村に響き渡った。

人々を照りつける太陽も、血の色だった。

闇は瞑い（くらい）もの。
夜は恐ろしいもの。
哀しみは……

やはり、恐ろしいもの。

その事実を、村人たちは改めて知らされることとなる。

全身から恨みの血を噴き出させ、山中を歩き回る蘇芳の姿に人々は震え上がった。

真っ赤に染まった異形の塊が、昼も夜もなく泣き叫ぶのだ。焦がれる相手を求め、その名を呼ぶ。山中に蘇芳の声が響く。

——つるばみ。つるばみ——

人々はそんな狂った蘇芳の姿に恐れ慄き、昼間から家屋の中に閉じこもるようになってしまった。誰もが耳を塞ぎ、この恨みの化け物が早く朽ちてくれないかと怯え震えた。

それでも雨は降らない。

大路はますます酒を煽り、ノノはますます男を啜え込む。

大地は乾き、滲み込むのはただ、蘇芳の赤い涙だけであった。

そんなある日、とうとう一人の少年が山に踏み入れた。山には狂った蘇芳が徘徊するようになって以来、誰一人として立ち入らなくなっていた。明る過ぎる太陽がぎら

ざらと葉叢を照らしているというのに、山は暗い。

山中に分け入ったとたん、獣の咆哮に似た叫びが響き渡った。少年は恐ろしさに最初は立ち止まったが、すぐに力強く歩き出した。声を頼りに蘇芳を探すためだ。彼は心底、蘇芳を気の毒だと思ったのだ。

人柱にされた魂込めビトの男のことも、この蘇芳というよそ者の男のことも、少年は嫌いではなかった。二人とも、確かに自分や村人たちとは違う空気をまとった人間だった。まるで風のようなと思ったこともある。

どこか自分たちとは違うほうを見て、いつも心もとなくなびいているような。自由なような。放心しているような。そんな彼らのことを、少年は決して嫌ってはいなかったのだ。

だから蘇芳に教えてあげようと思ったのだ。

橡の埋められた場所を。

痛切な声の響きを頼りに、山道に分け入る。やがて草むらの間から真っ赤なものが見えてきた時には、さすがに少年も足をすくませた。気配に振り返ったそれは、すでに人間ではなかったからだ。

頭のとっぺんから爪先まで、噴き出した血で真っ赤に濡れそぼったそれは、怨嗟の鬼であった。前後も上下もなく真っ赤な塊に見える。少年は震え上がった。が、塊の中から自分のほうへ向けられた双眸に、かすかな光を見出した彼は、腹の底に力を入れ、叫んだ。

「橡の埋められた場所、知っちゃるぞ」

双眸らしき黒い光が、揺れた。

「北東じゃ。鬼が来るっちゅう場所にあん人は埋められたんじゃ」

そう言って北東の方角を指すと、赤い異形の鬼はつむじのような勢いで駆け出した。その勢いに吹き飛ばされた少年は地面に転がってしまう。あわてて顔を上げた時には、もう鬼の姿はなかった。

少年はしばし啞然と、陽光にゆらゆらと揺らぐ草むらを見つめていた。

鬼……？

赤い影など、もうどこにもない。

いや。あれは。

少年の胸が苦しくなる。

あれは、人じゃ。

自分たちと紛う方なし、人じゃ。

『——めはなんどのやみをくい
ちいさいつぼみはさびのいろ
なみだにぬれたにんぎょうを
うめてもどしてあめやまぬ——

ふふふ。

さてお立ち合い。

この後、蘇芳はどうなったと思う？

少年のおかげで蘇芳は椽の埋められた場所を探し当てることができた。まだ盛り土の痕跡も新しい地面に身を伏せ、さめざめと泣いた。

——椽。私もあなたのもとへ参ります。今度生まれてきた時は、二度と離れませぬ。必ずや一生添い遂げましょうぞ——

そう言って蘇芳は木彫用の刀で喉を突き、果てた。村人たちが見つけた時、蘇芳は椽がいる盛り土の上に伏せ、穏やかな顔で死んでいたようだ。血の涙を流した形相は消え、もとの美しい相貌に戻っていたという。

村人たちは蘇芳の亡骸を村の共同墓所に手厚く葬った。さすがに彼らも、自分たちが非道な行いをしたと気付いたのかな。それとも単に蘇芳の怨念が怖かっただけかな……？

しかし。蘇芳を葬ると同時に、あれほど待ちわびていた雨が降り出したのさ。人々は狂喜乱舞。たちまち、自責や後悔の念などは吹き飛んだ。やっぱり魂込めビトを神に奉げたのがよかったのだと口々に言い合った。

まったく人の心とは、なんと手前勝手にできているのだろうね。

ふふふ。でもね。そうはうまくいかない。

今度は雨が止まなくなってしまったんだ。日に日に強さを増す雨は、せっかく突った稲も全部押し流し、村中を水浸しにした。村人たちは再び顔を青くした。やはり蘇芳や椽の祟りだと言い出す始末だ。

しかもそれだけではない。

なんと蘇芳が作った人形が、夜な夜な泣き叫ぶようになったのだ。どんな雨の轟きにも負けず、あの青い人形の細い泣き声が村人たちの耳に聞こえてくる。

——つるばみ。つるばみ——

とうとう半ばおかしくなっていたノノが、完全に発狂した。

椽から兄が奪った刀を抱き、神がかったように泡を吹いて叫んだ。

——蘇芳の身体を椽のもとへ返せ。でなければ我らは全員死に絶える！——

人々はあわてて墓所を掘り返した。ところが、蘇芳の屍骸を掘り返した人々は、驚愕に腰を抜かしてしまった。

何しろ、死んでから何日も経っていたのに、その姿は朽ちもせずに美しい容貌を保ったままだったのだ。人々はますます恐れ慄き、彼の屍骸を椽のもとへと運んだ。

そしてここで、もう一度人々は仰天することになる。なんと椽も生前の姿を留めたままに、縦に深く掘られた穴の中に立っていたのだ。すっかり怯えきった村人たちは、蘇芳を椽の隣に埋葬すると、手を合わせてひれ伏した。赦してください、どうぞ鎮まりくださいと。

さあ。これで雨は止んだと思うかい？

……ああ。そう。止まなかったのだ。

すべてが遅きに失したのだね。

山を轟かせ、草木をなぎ倒し、田んぼを押し流してもなお、雨は止まない。いつまでも止まない。

唄にもあるだろう？

——なみだにぬれたにんぎょうを

うめてもどしてあめやまぬ――

非業の死に追いやられ、今生の絆を断たれた二人は、どうあっても泣きやまなかったのだ。

そしてとうとう、蘇芳と椽以外近付かなかった沼の周囲が崩れ、沼が埋まってしまった。だから今、この村の周辺に沼などないだろう？ この時消えてしまったのだよ。

沼が埋没すると同時に、山全体が雪崩れ落ち、村へと押し寄せてきた。家屋も土地も押し潰され、村人の半分以上が死に絶えたというよ。

ここまで壊滅状態に追い込まれてやっと、雨は止んだ。山全体は崩れ、高かった峰の連なりは消え失せてしまった。ところが椽たちが埋められた箇所だけは崩れることもなく、この突き出た鼻のような形で残ったのだ。

そこで生き残った人々はすっかり畏れをなし、この場所に祠を建て、手厚く供養したというわけだ。

……えっ？ 大路やノノはどうしたかって？

ノノは助かったけれど、大路は山崩れに巻き込まれて死んだ。でも生き残ったノノも、生涯狂気のうちに生きたというから……気の毒と言えど気の毒だね。

ところで、この大路の最期には後日談があってね。ただ一人、大路が果てたところを目撃した人物がいたのだ。この人物の家は、村の家屋のほぼ全戸が壊滅状態だったというのに、たった一軒だけ壊滅を逃れて残った。一体誰だと思う？

蘇芳に椽の埋められている場所を教えてあげた少年さ。この少年の家だけは、なぜか押し寄せる洪水にも土砂にもびくともせずに残ったのさ。

そして村に押し寄せてくる山を振り仰いだ時、確かに見たと少年は後々語ったそうだよ。

沼がある方角の山腹から真っ白い大蛇が飛び出してきたと。大蛇は身をくねらせ、豪雨の中、村を目がけて降りてきた。その蛇の美しい白い肌を見て、なぜか少年はこの大蛇が女人だと思ったらしい。

そして大蛇は逃げ惑う人々の中にいる大路を頭から呑み込むと、そのまま天に向かって駆け上がり、ふっと姿を消したそう。山鳴りと豪雨の音が轟く中、少年は確かにこの光景を見たと言い張った。誰もそんな蛇を見てはいないというのに。けれど村の人々は一様にその話を信じ、震えた。事実、大路の死体は見つからなかったからね。

さあ。これで僕の話はお終いだ。あの悲しくも怖い唄の由来。長かったかな？ ごめんよ。

あれ、なんだか雲行きが怪しいね。

今にも雨が降り出しそうじゃないか……』

私は半ば呆然と薊（あざみ）様のお顔を見ておりました。頭の中はたった今聞かされた話でいっぱい、自分の周囲すべてが音を立てて崩れ落ちてしまいそうです。

正直に申し上げますと、話の途中から、私は不快やいたたまれなさに身をよじる思いだったの。だって、話に出てきた社家とは、私のご先祖様のことに違いありませんもの。

神事も担っていた我が一族は、確かに村の権力を一手に握っているわ。今は分家が神事を仕切っているけれど、長の役割は依然我が本家が担っている。どう聞いても、今の話は私のご先祖様が悪事を働き、二人の男を死に追いやったとしか思えない。

さらには大路が椽から奪ったという刀の話があるでしょう。

我が本家にも、代々家宝として伝わる刀が一振りあるの。よその土地の家紋が付いているのは、ご先祖様が戦の功績を讃えられ、領主様から賜ったものだからだと聞かされているわ。

でも薊様のお話では。ご先祖様があの刀の本来の主を陥れ、奪ったような内容じゃないの。失礼だわ。いくら薊様でも、不愉快よ。

思わず祠から目をそらしてしまったわ。不愉快なだけではない、なんだか怖いのですもの。木々を揺らす風が、ひやりと私の足元にまで忍んできます。

「ああ。寒くなってきた」

すると、傍らに立つ薊様が、私の肩をそっと抱いてくださったの。そして私を見てにこりと微笑む。とたんに、感じていた疑念や不快が溶けていくことを感じたわ。私もほっと笑いかけながら、薊様の肩に頭を寄せました。

そうよね。最初から創作だと薊様ご自身が言っていたじゃない。こんなの作り話。薊様のちょっとした遊びのようなものよ。

そんなものを真に受けて、怒ったり怖がったり、私ったらバカね……

薊様は私を不安がらせたり、悲しませたりするようなことは決してしないわ。だって初めてお会いした時から言ったださっているじゃない。

私が運命の人だと。やっと会えたと。

はしたないと思われるかもしれませんが、私は自分から接吻を求めて、薊様のほうへ顔を近づけました。薊様のひんやりした唇の感触は、私には何よりも愛しく、美味たるものなの——

「薊」

その時です。

異質な声が木々の梢を騒がせました。とたんに、ざざ、と葉ずれの音が鳴り響き、すべての音をかき消してしまいました。私ははっと声のほうを見て、目を見張りました。

黒い塊が近づいてくる。いえ、そう思うくらい、黒い色彩をまとった男が、私たちのほうへと近づいてくるのです！

男は村ではまず見かけない洋風の背広を着こなし、颯爽とした足取りで山道を登ってきます。黒い背広に黒いソフト帽。さらには陽が陰ってきた薄暗さも加わり、その姿はのっぺりとした一つの影に見えました。

……いいえ。違うわ。私ははっと息を呑みました。男は怖ろしいほど美しい切れ長の目を持っていたの。こちらの心身がざわめき出すような、奇妙に強い力を発している。それでいて近寄りがたい冷たさが全身を覆っているのよ……私はつい後じさってしまったわ。

男は私たちに近づき、ソフト帽を取ったわ。淡く笑うと、またこう言ったの。

「薊」

彼が名を呼べば呼ぶほど、私の薊様が吸い取られてしまいそう！ 思わず、私は薊様の袖を握ってしまったわ。

ところが。

薊様はぱっと私の手を払うと、嬉しそうに叫んだのよ。

「兄さん」

兄さん？ 私は驚愕のあまり、声も出なかったわ。

薊様が男のほうへ駆け寄ります。

「兄さん、来てくれたんだね。仕事のほうは」

彼の言葉に、男が印象から受ける冷たさとは釣り合わない優しい笑顔を見せ、答えます。

「弟の妻になる人にお会いすることは、何を置いても優先されるべきだろう。本家に伺ったら、ここに君たちが来ていると聞いてね」

言いながら男が私を見たの。

今初めて、私という存在に気付いたかのように。

「浅田柵（くぬぎ）と申します。愚弟との婚約が整った旨、連絡をいただいていたにも関わらずご挨拶が遅れた無礼をお許しください。今日は仕事によりやく目処が立ちましたので、取るものも取り敢えず、こうしてご挨拶にはせ参じた次第です」

すらすらと淀みない言葉が語られています。けれどそこに一切の温もりが感じられなかったのは……この場所が寒いから？

東京に、ただ一人の家族である兄がいるとは聞いておりました。大手製薬会社の研究者だとか。帝大を首席で卒業したほど優秀な方だとか……

でも。私はなぜかぶるりと震え上がってしまったの。

何かが近付いてくる。その予感が、冷たく私の全身をざわめかせたから。

すると、二人は私に背を向け、並んで歩き出してしまったの。私は追いかけるよ

うに、二人の後ろをあわてて付いて行きました。

薊様は楽しげに顔をほころばせ、兄の櫛様と語っています。その姿に、私は激しい嫉妬を覚えました。あんなくつろいだお顔、私には見せてくれたことがない。

「……」

ふと、私の頭に唐突に閃くものがありました。たった今薊様から聞かされた話の中で、蘇芳が最期に口にした言葉です。

——今度生まれてきた時は、二度と離れませぬ。必ずや一生添い遂げましょうぞ——

一生。この言葉が、私の全身の肌をざわりと逆立てます。

例えば。例えばあの二人が生まれ変わって兄弟になったとしたら……？ 否応なく生まれた時から一緒にいることになる。そしてもう二度と離れることはない……

まさか。とっさに私は頭を振り、今の考えを打ち消しました。

何を考えているの、私ったら。愚かしいわ。そしてついつい、もう、と薊様の後ろ姿を睨んでしまいます。

こんなふうに不安になってしまうのは、薊様が語られたお話があまりにも生々しかったからよ。まるで、薊様ご本人が見てきたかのようなようだったじゃないの——

「——」

うなじのあたりがぴりぴりと騒ぎます。言い知れぬ不安が足元から冷たく這い上がってくる。また蘇芳の言葉を思い出したからよ。

——この恨み、決して忘れぬ。孫子の代まで呪ってやる——

風がいったその冷たさを増し、ざざ、と吹き渡りました。私はその風に髪をなぶられながら、立ち尽くしました。

もしも薊様の言う『運命の人』が、まるで違う意味だったら……？

「やっと見つけた」。何を？

薊様は、恨みを晴らすべき我が本家をやっと見つけたと言ったのではないのか？

足が止まってしまう。お二人はその間にもどんどん離れていく。その姿に言い知れぬ寒気を感じながら、それでもまだ私は自分に言い聞かせていたの。

こんなの全部妄想よ。違う、違うわ、薊様は私を愛してくださっているの、私たちは幸せになるの……！ あんな、得体の知れない兄など気にすることはない。浅田、
柵……

柵？

「！」

とたんに私はへなへなと地面にへたり込んでしまった。今度こそ、恐ろしさが身体
の奥深くから湧いてきたの。自然と歯ががちがちと鳴る。

橡とは、柵の古名ではないか！

座り込んでしまった私を、お二人が振り向いて見ました。艶然と笑った四つの目が、
光ったように見えたのは気のせいでしょうか。

私はその輝きを見て、恐怖に心身の感覚が鈍っていくを感じながら、ぼんやりと考えておりました……

嫁いだ東京市では、一体何が待っているのでしょうか……？

柵様がふと天を仰ぎ、つぶやきました。

「雨が、降り出しそうだ」

めはなんどのやみをくい
ちいさいつぼみはさびのいろ
なみだにぬれたにんぎょうを
うめてもどしてあめやまぬ

あめ、やまぬ——

(了)